

半 期 報 告 書

(第2期中) 自 平成14年4月1日
至 平成14年9月30日

三井トラスト・ホールディングス株式会社

(501091)

第2期中(自平成14年4月1日 至平成14年9月30日)

半 期 報 告 書

- 1 本書は半期報告書を証券取引法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用して、平成14年12月26日に提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した半期報告書に添付された中間監査報告書を末尾に綴じ込んでおります。

三井トラスト・ホールディングス株式会社

目 次

	頁
第2期中 半期報告書	
【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【事業の内容】	5
3 【関係会社の状況】	5
4 【従業員の状況】	5
第2 【事業の状況】	6
1 【業績等の概要】	6
2 【生産、受注及び販売の状況】	23
3 【対処すべき課題】	23
4 【経営上の重要な契約等】	23
5 【研究開発活動】	23
第3 【設備の状況】	24
1 【主要な設備の状況】	24
2 【設備の新設、除却等の計画】	24
第4 【提出会社の状況】	25
1 【株式等の状況】	25
(1) 【株式の総数等】	25
(2) 【新株予約権等の状況】	28
(3) 【発行済株式総数、資本金等の状況】	29
(4) 【大株主の状況】	29
(5) 【議決権の状況】	30
2 【株価の推移】	31
3 【役員の状況】	31
第5 【経理の状況】	32
1 【中間連結財務諸表等】	33
(1) 【中間連結財務諸表】	33
【中間連結貸借対照表】	33
【中間連結損益計算書】	35
【中間連結剰余金計算書】	36
【中間連結キャッシュ・フロー計算書】	37
(2) 【その他】	74
2 【中間財務諸表等】	75
(1) 【中間財務諸表】	75
【中間貸借対照表】	75
【中間損益計算書】	77
(2) 【その他】	81
第6 【提出会社の参考情報】	82
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	83
中間監査報告書	
当中間連結会計期間	85
当中間会計期間	87

【表紙】

【提出書類】 半期報告書

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成14年12月26日

【中間会計期間】 第2期中(自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)

【会社名】 三井トラスト・ホールディングス株式会社

【英訳名】 Mitsui Trust Holdings, Inc.

【代表者の役職氏名】 取締役社長 古 沢 熙一郎

【本店の所在の場所】 東京都港区芝三丁目33番1号

【電話番号】 東京(5445)3500(大代表)

【事務連絡者氏名】 経営企画部次長 小 俣 耕 一

【最寄りの連絡場所】 東京都港区芝三丁目33番1号

【電話番号】 東京(5445)3500(大代表)

【事務連絡者氏名】 経営企画部次長 小 俣 耕 一

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

株式会社大阪証券取引所
(大阪市中央区北浜1丁目6番10号)

株式会社名古屋証券取引所
(名古屋市中区栄3丁目3番17号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当中間連結会計期間及び前連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

		平成14年度 中間連結会計期間		平成13年度	
		(自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	(自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)		
連結経常収益	百万円	258,249	532,120		
うち連結信託報酬	百万円	50,362	104,118		
連結経常利益 (は連結経常損失)	百万円	35,349	330,084		
連結中間純利益	百万円	40,880			
連結当期純損失	百万円		277,902		
連結純資産額	百万円	424,167	496,181		
連結総資産額	百万円	12,470,011	13,372,836		
1株当たり純資産額	円	9.90	79.27		
1株当たり中間純利益	円	50.19			
1株当たり当期純損失	円		350.60		
潜在株式調整後1株当たり中間純利益	円	22.78			
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円				
連結自己資本比率(第二基準(国内基準))	%	10.23	10.59		
営業活動によるキャッシュ・フロー	百万円	665,535	531,809		
投資活動によるキャッシュ・フロー	百万円	55,509	512,056		
財務活動によるキャッシュ・フロー	百万円	6,820	40,643		
現金及び現金同等物の中間期末残高	百万円	522,901			
現金及び現金同等物の期末残高	百万円		1,250,731		
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	9,756 [1,508]	9,985 [1,541]		
合算信託財産額	百万円	36,719,443	38,077,298		

- (注) 1 当社及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
- 2 平成13年度の1株当たり純資産額は、期末連結純資産額から「期末発行済優先株式数×発行価額」を控除した金額を、期末発行済普通株式数(「自己株式」及び「子会社の所有する親会社株式」を除く)で除して算出しております。
- 3 平成13年度の1株当たり当期純損失は、連結当期純損失から優先株式配当金総額を控除した金額を、期中平均発行済普通株式数(「自己株式」及び「子会社の所有する親会社株式」を除く)で除して算出しております。
- 4 平成13年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、純損失が計上されているため記載しておりません。
- 5 平成14年度中間連結会計期間から、「1株当たり純資産額」、「1株当たり中間純利益」及び「潜在株式調整後1株当たり中間純利益」(以下、「1株当たり情報」という。)の算定に当たっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
- また、これら1株当たり情報の算定上の基礎は、「第5 経理の状況」中、1「(1) 中間連結財務諸表」の「1株当たり情報」に記載しております。
- 6 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく大蔵省告示に定められた算式に基づき算出しております。なお、当社は第二基準を採用しております。
- 7 従業員数は、就業人員数を表示しております。
- 8 合算信託財産額は、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づき信託業務を営む連結会社毎の信託財産額を単純合算しております。なお、該当する信託業務を営む会社は中央三井信託銀行株式会社及び三井アセット信託銀行株式会社であります。

(2) 当社の当中間会計期間及び前事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第 2 期中	第 1 期
決算年月		平成14年 9 月	平成14年 3 月
営業収益	百万円	3,788	1,046
経常利益	百万円	10,584	22,315
中間純利益	百万円	8,626	
当期純利益	百万円		15,915
資本金	百万円	260,067	260,053
発行済株式総数	千株	普通株式 818,821 第一種優先株式 20,000 第二種優先株式 93,750 第三種優先株式 156,406	普通株式 818,795 第一種優先株式 20,000 第二種優先株式 93,750 第三種優先株式 156,406
純資産額	百万円	520,698	519,415
総資産額	百万円	869,322	884,379
1株当たり中間配当額	円	普通株式 第一種優先株式 第二種優先株式 第三種優先株式	
1株当たり配当額	円		普通株式 2.50 第一種優先株式 40.00 第二種優先株式 14.40 第三種優先株式 20.00
自己資本比率	%	59.90	58.73
従業員数	人	52	52

(注) 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2 【事業の内容】

当社を中心とした企業集団は、信託銀行業務を中心に証券業務、リース業務などの金融サービスの提供を行っており、当中間連結会計期間における事業の内容の変更はありません。

3 【関係会社の状況】

当中間連結会計期間において、新たに当社の関係会社となった会社は次のとおりであります。

(持分法適用の関連会社)

名称	住所	資本金又は出資金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有(又は被所有)割合(%)	当社との関係内容				
					役員の兼任等(人)	資金援助	営業上の取引	設備の賃貸借	業務提携
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社	東京都中央区	51,000	信託銀行業	33.3					
日本トラスティ情報システム株式会社	東京都府中市	300	計算受託	33.3 (28.3)					

(注) 「議決権の所有(又は被所有)割合」欄の()内は、子会社による間接所有の割合(内書き)であります。

4 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

平成14年9月30日現在

	信託銀行業	金融関連業その他	合計
従業員数(人)	9,125 [1,495]	631 [13]	9,756 [1,508]

(注) 1 従業員数は就業人員数であり、海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員1,844人を含んでおりません。

2 臨時従業員数は、〔 〕内に当中間連結会計期間の平均人員を外書で記載しております。

(2) 当社の従業員数

平成14年9月30日現在

従業員数(人)	52
---------	----

(注) 当社の従業員組合は、三井トラストフィナンシャルグループ従業員組合と称し、組合員数は18人でありませす。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

当中間連結会計期間における世界経済環境を顧みますと、不安定な中東情勢や、米国企業に端を發した一連の会計疑惑などを背景に、総じて減速傾向を強めております。各国の株価につきましても不透明な世界経済情勢の中、低迷が続いております。

一方で、我が国の経済環境につきましても、設備投資は下げ止まりつつあるものの、個人消費は弱含みに推移し、また、世界的な景気減速の中、輸出も鈍化する傾向を強めるなど、低迷を余儀なくされる状況であったといえます。また、株式市況についても、欧米の株価につられる形で下落、海外機関投資家による日本株式の売却が続いたこともあり、9月末には、日経平均株価は9,000円台前半となるなど一層低迷しております。

このような中、傘下の中央三井信託銀行と三井アセット信託銀行においては、お客さまにご提供する商品・サービスの「品質による差別化」戦略と「価格競争力による差別化」戦略の2つの差別化を組み合わせた事業戦略を展開、当社は、各事業部門間の調整を行い、経営資源を最適に配分することで、収益力の強化に向けて鋭意取り組んでまいりました。この戦略の効果をより一層高めていくため、グループ全社で従来より進めている「総経費削減プロジェクト」に加え、当中間連結会計期間には、最も効率的で効果的な業務運営態勢を構築していく観点から、新たに「業務改革プロジェクト」への取り組みを開始いたしました。このようなプロジェクトを通じて、業務効率を一層高め、ローコストオペレーションを徹底してまいります。

このような取り組みの結果、当中間連結会計期間における業績は、以下のとおりとなりました。

預金につきましては、当中間連結会計期間中5,714億円増加し、当中間連結会計期間末残高は8兆513億円となりました。信託財産総額につきましては、当中間連結会計期間中1兆3,578億円減少し、当中間連結会計期間末残高は36兆7,194億円となりました。

貸出金につきましては、銀行勘定では、当中間連結会計期間中1,774億円減少し、当中間連結会計期間末残高は7兆2,386億円となり、信託勘定では、当中間連結会計期間中2,218億円減少し、当中間連結会計期間末残高は2兆3,710億円となりました。

有価証券につきましては、銀行勘定では、当中間連結会計期間中1,080億円減少し、当中間連結会計期間末残高は3兆3,288億円となり、信託勘定では、当中間連結会計期間中411億円減少し、当中間連結会計期間末残高は22兆9,823億円となりました。

総資産につきましては、当中間連結会計期間中9,028億円減少し、当中間連結会計期間末残高は12兆4,700億円となりました。また、純資産額につきましては、当中間連結会計期間中720億円減少し、当中間連結会計期間末残高は4,241億円となりました。

損益状況につきましては、経常収益は2,582億円となり、経常費用は2,229億円となりました。この結果、経常利益は353億円となり、中間純利益は408億円となりました。また、1株当たり中間純利益は、50円19銭となりました。

なお、第二基準(国内基準)による連結自己資本比率は、10.23%となりました。

(事業の種類別セグメント情報)

信託銀行業については、経常収益は2,259億円、経常費用は2,022億円となりました結果、経常利益は236億円となりました。金融関連業その他については、経常収益は411億円、経常費用は292億円となりました結果、経常利益は118億円となりました。

(キャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは6,655億円の支出、投資活動によるキャッシュ・フローは555億円の支出、財務活動によるキャッシュ・フローは68億円の支出となりました。以上の結果、「現金及び現金同等物の中間期末残高」は、5,229億円となりました。

(1) 国内・国際業務部門別収支

信託報酬は503億円、資金運用収支は502億円、役務取引等収支は263億円、特定取引収支は2億円、その他業務収支は369億円となりました。

業務部門別にみますと、国内業務部門は、信託報酬が503億円、資金運用収支が447億円、役務取引等収支が304億円、特定取引収支が35百万円、その他業務収支が321億円となりました。

国際業務部門は、資金運用収支が52億円、役務取引等収支が1億円、特定取引収支が2億円、その他業務収支が48億円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
信託報酬	当中間連結会計期間	50,362			50,362
資金運用収支	当中間連結会計期間	44,787	5,275	139	50,202
うち資金運用収益	当中間連結会計期間	78,612	12,557	6,598	84,570
うち資金調達費用	当中間連結会計期間	33,825	7,281	6,738	34,368
役務取引等収支	当中間連結会計期間	30,465	158	4,237	26,386
うち役務取引等収益	当中間連結会計期間	39,014	680	11,553	28,141
うち役務取引等費用	当中間連結会計期間	8,549	522	7,316	1,754
特定取引収支	当中間連結会計期間	35	238		274
うち特定取引収益	当中間連結会計期間	35	238		274
うち特定取引費用	当中間連結会計期間				
その他業務収支	当中間連結会計期間	32,156	4,810		36,967
うちその他業務収益	当中間連結会計期間	32,455	5,112		37,568
うちその他業務費用	当中間連結会計期間	299	301		600

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額は、信託銀行連結子会社の国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借取引、ならびに連結会社相互間の内部取引金額であります。

(2) 国内・国際業務部門別資金運用 / 調達の状況

資金運用勘定につきましては、平均残高は11兆3,931億円、利息は845億円、利回りは1.48%となりました。

資金調達勘定につきましては、平均残高は11兆9,695億円、利息は343億円、利回りは0.57%となりました。

業務部門別にみますと、国内業務部門につきましては、資金運用勘定の平均残高は12兆3,992億円(うち貸出金は7兆896億円、有価証券は4兆386億円)、利息は786億円(うち貸出金は581億円、有価証券は183億円)となりました。この結果、利回りは、1.26%(うち貸出金は1.63%、有価証券は0.90%)となりました。資金調達勘定の平均残高は12兆2,917億円(うち預金は7兆7,635億円、借入金は7,890億円)、利息は338億円(うち預金は152億円、借入金は87億円)となりました。この結果、利回りは、0.54%(うち預金は0.39%、借入金は2.20%)となりました。

国際業務部門につきましては、資金運用勘定の平均残高は9,346億円(うち貸出金は4,743億円、有価証券は3,227億円)、利息は125億円(うち貸出金は56億円、有価証券は64億円)となりました。この結果、利回りは、2.67%(うち貸出金は2.38%、有価証券は3.96%)となりました。資金調達勘定の平均残高は8,538億円(うち預金は380億円、借入金は228億円)、利息は72億円(うち預金は2億円、借入金は3億円)となりました。この結果、利回りは、1.70%(うち預金は1.48%、借入金は3.09%)となりました。

国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	当中間連結会計期間	12,399,260	78,612	1.26
うち貸出金	当中間連結会計期間	7,089,636	58,181	1.63
うち有価証券	当中間連結会計期間	4,038,697	18,301	0.90
うちコールローン 及び買入手形	当中間連結会計期間	475,373	7	0.00
うち買現先勘定	当中間連結会計期間	21,482	0	0.00
うち債券貸借取引 支払保証金	当中間連結会計期間	1,459	0	0.00
うち預け金	当中間連結会計期間	36,895	4	0.02
資金調達勘定	当中間連結会計期間	12,291,768	33,825	0.54
うち預金	当中間連結会計期間	7,763,565	15,205	0.39
うち譲渡性預金	当中間連結会計期間	252,110	161	0.12
うちコールマネー 及び売渡手形	当中間連結会計期間	432,350	6	0.00
うち売現先勘定	当中間連結会計期間	1,939	0	0.00
うち債券貸借取引 受入担保金	当中間連結会計期間	40,955	3	0.01
うち借入金	当中間連結会計期間	789,030	8,705	2.20

(注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、一部の国内連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	当中間連結会計期間	934,678	12,557	2.67
うち貸出金	当中間連結会計期間	474,325	5,670	2.38
うち有価証券	当中間連結会計期間	322,799	6,423	3.96
うちコールローン 及び買入手形	当中間連結会計期間	14,332	130	1.81
うち買現先勘定	当中間連結会計期間			
うち債券貸借取引 支払保証金	当中間連結会計期間			
うち預け金	当中間連結会計期間	118,652	582	0.97
資金調達勘定	当中間連結会計期間	853,808	7,281	1.70
うち預金	当中間連結会計期間	38,088	284	1.48
うち譲渡性預金	当中間連結会計期間			
うちコールマネー 及び売渡手形	当中間連結会計期間	1,243	11	1.88
うち売現先勘定	当中間連結会計期間			
うち債券貸借取引 受入担保金	当中間連結会計期間	25,807	348	2.69
うち借入金	当中間連結会計期間	22,832	354	3.09

- (注) 1 海外連結子会社の平均残高は、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
 2 「国際業務」とは、信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺消去額 ()	合計	小計	相殺消去額 ()	合計	
資金運用勘定	当中間連結会計期間	13,333,938	1,940,740	11,393,198	91,169	6,598	84,570	1.48
うち貸出金	当中間連結会計期間	7,563,962	382,688	7,181,273	63,851	2,876	60,975	1.69
うち有価証券	当中間連結会計期間	4,361,497	763,992	3,597,505	24,725	1,926	22,798	1.26
うちコールローン 及び買入手形	当中間連結会計期間	489,706		489,706	137		137	0.05
うち買現先勘定	当中間連結会計期間	21,482		21,482	0		0	0.00
うち債券貸借取引 支払保証金	当中間連結会計期間	1,459		1,459	0		0	0.00
うち預け金	当中間連結会計期間	155,548	58,345	97,203	586	38	548	1.12
資金調達勘定	当中間連結会計期間	13,145,577	1,176,005	11,969,571	41,107	6,738	34,368	0.57
うち預金	当中間連結会計期間	7,801,654	58,345	7,743,309	15,489	38	15,451	0.39
うち譲渡性預金	当中間連結会計期間	252,110		252,110	161		161	0.12
うちコールマネー 及び売渡手形	当中間連結会計期間	433,593		433,593	18		18	0.00
うち売現先勘定	当中間連結会計期間	1,939		1,939	0		0	0.00
うち債券貸借取引 受入担保金	当中間連結会計期間	66,763		66,763	351		351	1.05
うち借入金	当中間連結会計期間	811,863	381,946	429,917	9,060	3,044	6,015	2.79

(注) 相殺消去額は、信託銀行連結子会社の国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借取引、ならびに連結会社相互間の内部取引金額であります。

(3) 国内・国際業務部門別役務取引の状況

役務取引等収益は281億円、役務取引等費用は17億円となりました。

業務部門別にみますと、国内業務部門の役務取引等収益は390億円(うち信託関連業務は257億円)、役務取引等費用は85億円となりました。

国際業務部門の役務取引等収益は6億円、役務取引等費用は5億円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	当中間連結会計期間	39,014	680	11,553	28,141
うち信託関連業務	当中間連結会計期間	25,773		5,715	20,058
うち預金・貸出業務	当中間連結会計期間	1,806		211	1,595
うち為替業務	当中間連結会計期間	718	53		772
うち証券関連業務	当中間連結会計期間	1,147	537	196	1,488
うち代理業務	当中間連結会計期間	1,703	7		1,711
うち保護預り・貸金庫業務	当中間連結会計期間	200			200
うち保証業務	当中間連結会計期間	2,743	81	705	2,120
役務取引等費用	当中間連結会計期間	8,549	522	7,316	1,754
うち為替業務	当中間連結会計期間	273	187		460

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また、「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額は、連結会社相互間の内部取引金額であります。

(4) 国内・国際業務部門別特定取引の状況

特定取引収益・費用の内訳

特定取引収益は274百万円(うち特定金融派生商品収益171百万円)となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引収益	当中間連結会計期間	35	238		274
うち商品有価証券収益	当中間連結会計期間	34	0		34
うち特定取引有価証券収益	当中間連結会計期間		67		67
うち特定金融派生商品収益	当中間連結会計期間		171		171
うちその他の特定取引収益	当中間連結会計期間	0			0
特定取引費用	当中間連結会計期間				
うち商品有価証券費用	当中間連結会計期間				
うち特定取引有価証券費用	当中間連結会計期間				
うち特定金融派生商品費用	当中間連結会計期間				
うちその他の特定取引費用	当中間連結会計期間				

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また、「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額は、連結会社相互間の内部取引金額であります。

3 内訳科目はそれぞれの収益と費用で相殺し、収益が上回った場合には収益欄に、費用が上回った場合には費用欄に、上回った純額を計上しております。

特定取引資産・負債の内訳(未残)

特定取引資産は136億円(うち特定金融派生商品121億円)、特定取引負債は125億円(うち特定金融派生商品125億円)となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引資産	当中間連結会計期間	1,539	12,111		13,650
うち商品有価証券	当中間連結会計期間	539			539
うち商品有価証券 派生商品	当中間連結会計期間				
うち特定取引有価証券	当中間連結会計期間				
うち特定取引 有価証券派生商品	当中間連結会計期間		1		1
うち特定金融派生商品	当中間連結会計期間		12,109		12,109
うちその他の 特定取引資産	当中間連結会計期間	999			999
特定取引負債	当中間連結会計期間		12,582		12,582
うち売付商品債券	当中間連結会計期間				
うち商品有価証券 派生商品	当中間連結会計期間				
うち特定取引売付債券	当中間連結会計期間				
うち特定取引 有価証券派生商品	当中間連結会計期間				
うち特定金融 派生商品	当中間連結会計期間		12,582		12,582
うちその他の 特定取引負債	当中間連結会計期間				

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また、「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額は、連結会社相互間の内部取引金額であります。

(5) 「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務の状況

「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づき信託業務を営む連結会社毎の信託財産額を単純合算しております。

信託財産の運用 / 受入状況(信託財産残高表)

資産		
科目	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)
貸出金	2,371,014	6.46
有価証券	22,982,311	62.59
投資信託有価証券	3,337,297	9.09
投資信託外国投資	669,529	1.82
信託受益権	973,865	2.65
受託有価証券	16,732	0.05
金銭債権	963,925	2.63
動産不動産	1,235,539	3.36
地上権	2,445	0.01
土地の賃借権	3,407	0.01
その他債権	318,874	0.87
買入手形	5,299	0.01
コールローン	1,077,134	2.93
銀行勘定貸	2,416,348	6.58
現金預け金	345,716	0.94
合計	36,719,443	100.00

負債		
科目	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	17,345,823	47.24
年金信託	6,389,096	17.40
財産形成給付信託	20,228	0.06
貸付信託	2,850,987	7.76
投資信託	4,799,077	13.07
金銭信託以外の金銭の信託	1,149,668	3.13
有価証券の信託	935,005	2.55
金銭債権の信託	886,673	2.42
動産の信託	970	0.00
土地及びその定着物の信託	115,472	0.31
包括信託	2,226,439	6.06
合計	36,719,443	100.00

(注) 1 合算対象の連結子会社 当中間連結会計期間末 中央三井信託銀行株式会社
三井アセット信託銀行株式会社
2 共同信託他社管理財産 当中間連結会計期間末 9,251,013百万円

貸出金残高の状況(業種別貸出状況)

業種別	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	
	貸出金残高(百万円)	構成比(%)
製造業	184,262	7.77
農業	78	0.00
林業	364	0.02
漁業		
鉱業	977	0.04
建設業	20,200	0.85
電気・ガス・熱供給・水道業	228,174	9.62
運輸・通信業	302,347	12.75
卸売・小売業、飲食店	66,205	2.79
金融・保険業	162,408	6.85
不動産業	235,698	9.94
サービス業	107,734	4.55
地方公共団体	10,142	0.43
その他	1,052,417	44.39
合計	2,371,014	100.00

元本補てん契約のある信託の運用 / 受入状況

科目	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)		
	金銭信託(百万円)	貸付信託(百万円)	合計(百万円)
貸出金	433,665	1,836,234	2,269,900
有価証券	2	135,263	135,265
その他	1,208,775	1,154,461	2,363,237
資産計	1,642,443	3,125,960	4,768,403
元本	1,641,792	3,091,595	4,733,387
債権償却準備金	189		189
特別留保金		15,439	15,439
その他	461	18,924	19,386
負債計	1,642,443	3,125,960	4,768,403

(注) 1 信託財産の運用のため再信託された信託を含みます。

2 リスク管理債権の状況

(当中間連結会計期間末)

貸出金2,269,900百万円のうち、破綻先債権額は25,568百万円、延滞債権額は37,045百万円、3ヵ月以上延滞債権額は318百万円、貸出条件緩和債権額は50,102百万円であります。また、これらの債権額の合計額は113,035百万円であります。ただし、上記債権額のうち、最終処理につながる措置である㈱整理回収機構への管理信託方式による処理分は1,171百万円であります。

(参考)資産の査定額

資産の査定は貸付有価証券、貸出金等の各勘定について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産、会社更生、再生手続等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態に至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	平成14年9月30日
	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	349
危険債権	248
要管理債権	533
正常債権	22,103

(6) 銀行業務の状況

国内・国際業務部門別預金残高の状況

預金の種類別残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	当中間連結会計期間	8,045,420	24,378	18,497	8,051,301
うち流動性預金	当中間連結会計期間	1,681,500		16,034	1,665,465
うち定期性預金	当中間連結会計期間	6,319,167		1,090	6,318,077
うちその他	当中間連結会計期間	44,752	24,378	1,372	67,758
譲渡性預金	当中間連結会計期間	248,700			248,700
総合計	当中間連結会計期間	8,294,120	24,378	18,497	8,300,001

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また、「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額は、連結会社相互間の内部取引金額であります。

3 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金

4 定期性預金 = 定期預金

国内・国際業務部門別貸出金残高の状況
業種別貸出状況(残高・構成比)

業種別	平成14年 9月30日	
	貸出金残高(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	7,139,631	100.00
製造業	897,386	12.57
農業	1,170	0.02
林業	780	0.01
漁業	6,003	0.08
鉱業	13,474	0.19
建設業	315,170	4.42
電気・ガス・熱供給・水道業	65,981	0.92
運輸・通信業	511,918	7.17
卸売・小売業、飲食店	715,423	10.02
金融・保険業	1,085,806	15.21
不動産業	1,180,949	16.54
サービス業	657,020	9.20
地方公共団体	13,597	0.19
その他	1,674,945	23.46
海外及び特別国際金融取引勘定分	98,976	100.00
政府等	12,035	12.16
金融機関	123	0.12
その他	86,817	87.72
合計	7,238,607	

(注) 「国内」とは当社及び国内連結子会社であります。
「海外」とは、海外連結子会社であります。

外国政府等向け債権残高(国別)

期別	国別	外国政府等向け債権残高 (百万円)
平成14年9月30日	インドネシア	17,289
	フィリピン	6,163
	コロンビア	2,080
	ブラジル	1,821
	その他(5ヶ国)	929
	合計	28,284
	(資産の総額に対する割合：%)	(0.22)

(注) 「外国政府等向け債権」とは、日本公認会計士協会の銀行等監査特別委員会報告第4号に規定する特定海外債権引当勘定を計上している国の外国政府、中央銀行、政府金融機関、国営企業及び民間企業向けの債権であります。

国内・国際業務部門別有価証券の状況

有価証券残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	当中間連結会計期間	1,672,232			1,672,232
地方債	当中間連結会計期間	59,051			59,051
社債	当中間連結会計期間	268,944		100,000	168,944
株式	当中間連結会計期間	1,715,480		580,851	1,134,628
その他の証券	当中間連結会計期間	71,936	295,287	73,193	294,030
合計	当中間連結会計期間	3,787,645	295,287	754,045	3,328,888

(注) 1 「国内業務」とは、信託銀行連結子会社の円建取引ならびに当社及びその他の国内連結子会社に係る取引であります。また、「国際業務」とは信託銀行連結子会社の外貨建取引及び海外連結子会社に係る取引であります。ただし、信託銀行連結子会社の円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第52条の9の規定に基づき連結自己資本比率の基準を定める件(平成10年大蔵省告示第62号。以下、「告示」という)に定められた算式に基づき、連結ベースについて算出しております。

なお、当社は、第二基準(国内基準)を適用しております。

連結自己資本比率(第二基準(国内基準))

項目		平成14年9月30日
		金額(百万円)
基本的項目	資本金	260,067
	うち非累積的永久優先株	216,125
	新株式払込金	
	資本剰余金	227,325
	利益剰余金	41,008
	連結子会社の少数株主持分	66,277
	うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券	57,100
	その他有価証券の評価差損()	105,789
	自己株式()	486
	為替換算調整勘定	938
	営業権相当額()	
	連結調整勘定相当額()	
	計 (A)	487,465
	うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券(注1)	29,600
補完的項目	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	3,523
	一般貸倒引当金	69,533
	負債性資本調達手段等	478,896
	うち永久劣後債務(注2)	190,355
	うち期限付劣後債務および期限付優先株(注3)	288,541
	計	551,953
うち自己資本への算入額 (B)	487,465	
控除項目	控除項目(注4) (C)	2,504
自己資本額	(A) + (B) - (C) (D)	972,425
リスク・アセット等	資産(オン・バランス)項目	8,111,237
	オフ・バランス取引項目	1,389,258
	計 (E)	9,500,495
連結自己資本比率(第二基準) = D / E × 100(%)		10.23

- (注) 1 告示第13条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。
- 2 告示第14条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものではありません。
- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
 - (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
 - (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
 - (4) 利払い義務の延期が認められるものであること
- 3 告示第14条第1項第4号および第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。
- 4 告示第15号第1項第1号に掲げる他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額、および第2号に規定するものに対する投資に相当する額であります。

() 当社は「海外特別目的会社の発行する優先出資証券」を以下のとおり発行し、「連結自己資本比率」の「基本的項目」に計上しております。

発行会社	MTH Preferred Capital 1 (Cayman) Limited	MTH Preferred Capital 2 (Cayman) Limited
発行証券の種類	配当非累積型優先株式	配当非累積型優先株式
償還期日	定めなし	定めなし
任意償還	平成24年7月以降の各配当支払日に任意償還可能(ただし、監督当局の事前承認が必要)	平成19年7月以降の各配当支払日に任意償還可能(ただし、監督当局の事前承認が必要)
発行総額	275億円	296億円
払込日	平成14年3月25日	平成14年3月25日
配当支払日	毎年7月25日と1月25日	毎年7月25日と1月25日
配当率	変動配当(ステップアップなし)	変動配当(但し、平成24年7月より後に到来する配当支払日以降はステップアップ配当が付される)
配当支払に関する条件概要	<p>(1) 本優先株式への配当は、直近営業年度の当社配当可能利益額(当社優先株式への配当があればその額を控除した額)の範囲内で支払われる。</p> <p>(2) 配当停止条件 以下のいずれかの事項に該当する場合は、本優先株式への配当は支払われないものとする。 当社が直近営業年度にかかる当社優先株式への配当を支払わなかった場合 当社が支払不能状態である旨の証明書を発行会社に交付した場合 当社の自己資本比率が規制上必要な水準を下回った場合 当社が発行会社に対して配当不払指示を交付した場合</p> <p>(3) 強制配当 当社が直近営業年度にかかる当社普通株式への配当を実施した場合には、本優先株式への配当は全額支払われる。但し、上記(1)ならびに(2)の制限に服する。</p>	同左
残余財産請求権	本優先株式の株主は、当社優先株式と実質的に同順位の残余財産請求権を保有する。	同左

2 【生産、受注及び販売の状況】

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

3 【対処すべき課題】

我が国の景気後退や株価低迷が続く状況下、不良債権最終処理の促進・株式保有制限の実施等、金融機関は依然として対処すべき多くの課題を抱えております。三井トラストフィナンシャルグループは、これらの課題に適切に対処するとともに、これまで以上に差別化戦略を展開しさらなる収益力の向上を図っていくことで、「信託業務をコアとする高度な金融商品・サービスを提供する特色ある金融グループとして、透明性の高い効率的な経営の下で、お客さまのご期待にお応えし、広く社会に貢献する企業グループ」を目指し、グループ価値・株主価値の最大化の実現に向け、役職員一同業務に邁進してまいり所存でございます。

4 【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

5 【研究開発活動】

該当ありません。

第3 【設備の状況】

1 【主要な設備の状況】

当中間連結会計期間中に完成した新設、増改築等は次のとおりであります。

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	設備の内容	敷地面積 (㎡)	建物延面積 (㎡)	完了年月
中央三井信託 銀行株式会社	石神井支店	東京都練馬区	移転	店舗	303.99	827.47	平成14年4月
	セレスティン 芝三井ビル	東京都港区	新設	事務所		7,482.90	平成14年5月
	日本橋営業部 他31店	東京都中央区 他	改修	店舗			平成14年5月
三井アセット 信託銀行株式 会社	セレスティン 芝三井ビル	東京都港区	新設	店舗・事務所		7,482.90	平成14年5月

また、当中間連結会計期間において、以下の主要な設備を除却、売却しております。

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	設備の内容	時期	前連結会計年度末帳簿価額 (百万円)
中央三井信託 銀行株式会社	旧阿佐谷北支 店	東京都杉並区	売却	店舗	平成14年5月	337
	旧六会支店	神奈川県 藤沢市	売却	店舗	平成14年5月	169
	旧新宿東支店	東京都新宿区	売却	店舗	平成14年6月	128
	旧深川支店	東京都江東区	売却	店舗	平成14年6月	584
	旧東村山支店	東京都 東村山市	売却	店舗	平成14年6月	336
	旧日本橋本部	東京都中央区	除却	事務所	平成14年 6月～9月	1,308
	旧佐倉支店	千葉県佐倉市	売却	店舗	平成14年9月	215
	旧鶴間支店	神奈川県 大和市	売却	店舗	平成14年9月	336
	旧千葉支店	千葉市中央区	除却	店舗	平成14年9月	180

2 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 前連結会計年度末において計画であった重要な設備の新設、増改築等のうち当中間連結会計期間中に重要な変更のあったものはありません。

(2) 当中間連結会計期間中に新たに確定した重要な設備の新設、除却等の計画は次のとおりであります。

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	設備の内容	時期	中間期末帳簿価額 (百万円)
中央三井信託 銀行株式会社	旧北本支店	埼玉県北本市	売却	店舗	平成14年10月	335
	旧狭山支店	埼玉県狭山市	売却	店舗	平成14年10月	222
	旧武蔵関支店	東京都練馬区	売却	店舗	平成14年10月	314
	旧池尻支店	東京都 世田谷区	売却	店舗	平成14年10月	468
	東京中央支店	東京都中央区	除却	店舗	平成15年2月	151

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	会社が発行する株式の総数(株)
普通株式	4,068,332,436
第一種優先株式	20,000,000
第二種優先株式	93,750,000
第三種優先株式	156,406,250
第四種優先株式	14,518,750
計	4,353,007,436

(注) 当社定款におきまして、次のとおり規定しております。

当社の発行する株式の総数は、4,353,007,436株とし、その内訳は次のとおりとする。ただし、普通株式につき消却があった場合または優先株式につき消却もしくは普通株式への転換があった場合には、これに相当する株式数を減ずる。普通株式4,068,332,436株、第一種優先株式20,000,000株、第二種優先株式93,750,000株、第三種優先株式156,406,250株、第四種優先株式14,518,750株。

【発行済株式】

種類	中間会計期間末 現在発行数(株) (平成14年9月30日)	提出日現在 発行数(株) (平成14年12月26日)	上場証券取引所名又は 登録証券業協会名	内容
普通株式 (注) 1	818,821,059	818,865,604	東京証券取引所 市場第一部 大阪証券取引所 市場第一部 名古屋証券取引所 市場第一部	完全議決権株式であり、権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
第一種優先株式	20,000,000	20,000,000		(注) 2
第二種優先株式	93,750,000	93,750,000		(注) 3
第三種優先株式	156,406,250	156,406,250		(注) 4
計	1,088,977,309	1,089,021,854		

(注) 1 提出日現在の発行数には、平成14年12月1日から半期報告書提出日までの新株予約権の行使(旧商法に基づき発行された転換社債の転換を含む。)により発行された株式数は含まれておりません。

2 第一種優先株式の内容は次のとおりであります。

(1) 優先配当金

優先配当金

優先配当を行う時は、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき年40円の優先配当金を支払う。

ただし、優先中間配当金の全部または一部を支払ったときは、その額を控除した額とする。

非累積条項

ある営業年度において本優先株主または優先登録質権者に対して支払う利益配当金の額が優先配当金の額に達しないときは、その不足額は翌営業年度以降に累積しない。

非参加条項

本優先株主または優先登録質権者に対しては優先配当金の額を超えて配当はしない。

優先中間配当金

中間配当を行うときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき20円の優先中間配当金を支払う。

(2) 残余財産の分配

残余財産を分配するときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき1,600円を支払う。これを超えて残余財産の分配はしない。

(3) 普通株式への転換

転換を請求し得べき期間

当会社設立の日から平成30年7月31日までとする。ただし、株主総会において権利を行使すべき株主を確定するための一定の日を定めたときは、その翌日から当該株主総会終結の日までの期間を除く。

当初転換価額

当初転換価額は395円40銭とする。

転換価額の修正

転換価額は、当会社設立の日から平成29年8月1日までの毎年8月1日における当会社の株式の時価がその時における有効な転換価額を下回る場合には、かかる時価に修正される。ただし、当該時価が395円40銭を下回る場合には395円40銭を限度とする。

転換価額の調整

今後当会社が時価を下回る払込金額をもって普通株式を発行する場合や、株式の分割により普通株式を発行する場合等、一定の事由が生じた場合には、転換価額を調整する。

(4) 普通株式への一斉転換

平成30年7月31日までに転換請求のなかった本優先株式は、平成30年8月1日をもって、1,600円を定款第18条に定める当会社の普通株式の時価(当該時価が400円を下回るときは400円)で除して得られる数の普通株式となる。

(5) 議決権

本優先株主は株主総会において議決権を有しない。ただし、法令の定める場合はこの限りではない。

(6) 新株引受権等

法令に定める場合を除き、本優先株式について株式の併合または分割は行わない。本優先株主には新株の引受権または新株予約権付社債の引受権を与えない。

3 第二種優先株式の内容は次のとおりであります。

(1) 優先配当金

優先配当金

優先配当を行う時は、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき年14円40銭の優先配当金を支払う。

ただし、優先中間配当金の全部または一部を支払ったときは、その額を控除した額とする。

非累積条項

ある営業年度において本優先株主または優先登録質権者に対して支払う利益配当金の額が優先配当金の額に達しないときは、その不足額は翌営業年度以降に累積しない。

非参加条項

本優先株主または優先登録質権者に対しては優先配当金の額を超えて配当はしない。

優先中間配当金

中間配当を行うときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき7円20銭の優先中間配当金を支払う。

(2) 残余財産の分配

残余財産を分配するときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき1,600円を支払う。これを超えて残余財産の分配はしない。

(3) 普通株式への転換

転換を請求し得べき期間

当会社設立の日から平成21年7月31日までとする。ただし、株主総会において権利を行使すべき株主を確定するための一定の日を定めたときは、その翌日から当該株主総会終結の日までの期間を除く。

当初転換価額

当初転換価額は450円とする。

転換価額の修正

転換価額は、当会社設立の日から平成20年8月1日までの毎年8月1日における当会社の株式の時価がその時における有効な転換価額を下回る場合には、かかる時価に修正される。ただし、当該時価が450円を下回る場合には450円を限度とする。

転換価額の調整

今後当社が時価を下回る払込金額をもって普通株式を発行する場合や、株式の分割により普通株式を発行する場合等、一定の事由が生じた場合には、転換価額を調整する。

(4) 普通株式への一斉転換

平成21年7月31日までに転換請求のなかった本優先株式は、平成21年8月1日をもって、1,600円を定款第18条に定める当会社の普通株式の時価(当該時価が400円を下回るときは400円)で除して得られる数の普通株式となる。

(5) 議決権

本優先株主は株主総会において議決権を有しない。ただし、法令の定める場合はこの限りではない。

(6) 新株引受権等

法令に定める場合を除き、本優先株式について株式の併合または分割は行わない。本優先株主には新株の引受権または新株予約権付社債の引受権を与えない。

4 第三種優先株式の内容は次のとおりであります。

(1) 優先配当金

優先配当金

優先配当を行う時は、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき年20円の優先配当金を支払う。

ただし、優先中間配当金の全部または一部を支払ったときは、その額を控除した額とする。

非累積条項

ある営業年度において本優先株主または優先登録質権者に対して支払う利益配当金の額が優先配当金の額に達しないときは、その不足額は翌営業年度以降に累積しない。

非参加条項

本優先株主または優先登録質権者に対しては優先配当金の額を超えて配当はしない。

優先中間配当金

中間配当を行うときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき10円の優先中間配当金を支払う。

(2) 残余財産の分配

残余財産を分配するときは、本優先株主または優先登録質権者に対し普通株主または普通登録質権者に先立ち、優先株式1株につき1,600円を支払う。これを超えて残余財産の分配はしない。

(3) 普通株式への転換

転換を請求し得べき期間

当会社設立の日から平成21年7月31日までとする。ただし、株主総会において権利を行使すべき株主を確定するための一定の日を定めたときは、その翌日から当該株主総会終結の日までの期間を除く。

当初転換価額

当初転換価額は450円とする。

転換価額の修正

転換価額は、当会社設立の日から平成20年8月1日までの毎年8月1日における当会社の株式の時価がその時における有効な転換価額を下回る場合には、かかる時価に修正される。ただし、当該時価が450円を下回る場合には450円を限度とする。

転換価額の調整

今後当社が時価を下回る払込金額をもって普通株式を発行する場合や、株式の分割により普通株式を発行する場合等、一定の事由が生じた場合には、転換価額を調整する。

(4) 普通株式への一斉転換

平成21年7月31日までに転換請求のなかった本優先株式は、平成21年8月1日をもって、1,600円を定款第18条に定める当社の普通株式の時価(当該時価が400円を下回るときは400円)で除して得られる数の普通株式となる。

(5) 議決権

本優先株主は株主総会において議決権を有しない。ただし、法令の定める場合はこの限りではない。

(6) 新株引受権等

法令に定める場合を除き、本優先株式について株式の併合または分割は行わない。本優先株主には新株の引受権または新株予約権付社債の引受権を与えない。

(2) 【新株予約権等の状況】

	中間会計期間末現在 (平成14年9月30日)	提出日の前月末現在 (平成14年11月30日)
新株予約権の数(個)		
新株予約権の目的となる株式の種類		
新株予約権の目的となる株式の数(株)		
新株予約権の行使時の払込金額(円)		
新株予約権の行使期間		
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)		
新株予約権の行使の条件		
新株予約権の譲渡に関する事項		

(注) 当社は、旧商法に基づき転換社債を発行しております。

当該転換社債の残高、転換価格及び資本組入額は次のとおりであります。

銘柄 (発行年月日)	中間会計期間末現在 (平成14年9月30日)			提出日の前月末現在 (平成14年11月30日)		
	残高 (千円)	転換価格 (円)	資本組入額 (1株につき円)	残高 (千円)	転換価格 (円)	資本組入額 (1株につき円)
2007年満期 円建劣後転換社債 (平成14年2月25日)	625,000	1,100	1	576,000	1,100	1
永久劣後円建 転換社債 (平成14年2月25日)	2,630,000 2	1,600 3	800	2,630,000	1,600 3	800

1 転換により発行される株式の発行価額中資本に組み入れる額は、当該転換の対象となった本社債の発行価額に0.5を乗じた額とし、計算の結果1円未満の端数を生ずる場合、この端数を切り上げた金額とします。

2 平成14年9月25日に16,100百万円を一部買入消却し、社債総額を2,630百万円に変更しております。

3 転換により発行される株式は、当社第四種優先株式です。

(3) 【発行済株式総数、資本金等の状況】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成14年4月1日～ 平成14年9月30日 (注)1	25	1,088,977	14,000	260,067,500	14,000	243,470,129

(注) 1 旧商法に基づく転換社債の転換による当中間会計期間中の合計数・額であります。

2 平成14年10月1日から平成14年11月30日までの間に転換社債の転換により発行済株式総数が44千株、資本金が24百万円、資本準備金が24百万円増加し、平成14年11月30日現在の発行済株式総数は1,089,021千株、資本金は260,092百万円、資本準備金は243,494百万円となっております。

(4) 【大株主の状況】

普通株式

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	平成14年9月30日現在
			発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	19,629	2.39
三井生命保険相互会社	東京都中央区晴海1丁目8番11号 常任代理人 日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社	18,148	2.21
三井不動産株式会社	東京都中央区日本橋室町2丁目1番1号	17,724	2.16
包括信託三井アセット信託 トヨタ自動車口	東京都港区芝3丁目23番1号	15,226	1.85
東武鉄道株式会社	東京都墨田区押上1丁目1番2号	13,355	1.63
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区有楽町1丁目1番2号	10,994	1.34
三井化学株式会社	東京都千代田区霞が関3丁目2番5号	10,646	1.30
日本証券代行株式会社	東京都中央区日本橋茅場町 1丁目2番4号	10,557	1.28
東京急行電鉄株式会社	東京都渋谷区南平台町5番6号	10,318	1.26
包括信託三井アセット信託 名古屋鉄道口	東京都港区芝3丁目23番1号	10,060	1.22
計		136,658	16.68

(注) 1 三井生命保険相互会社は常任代理人を設定したことに伴い住所が変更されております。

2 包括信託三井アセット信託トヨタ自動車口及び名古屋鉄道口は三井アセット信託銀行株式会社の本店移転に伴い住所が変更されております。

第一種優先株式

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	平成14年9月30日現在
			発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
株式会社 整理回収機構	東京都中野区本町2丁目46番1号	20,000	100.00
計		20,000	100.00

第二種優先株式

平成14年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
株式会社 整理回収機構	東京都中野区本町2丁目46番1号	93,750	100.00
計		93,750	100.00

第三種優先株式

平成14年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
株式会社 整理回収機構	東京都中野区本町2丁目46番1号	156,406	100.00
計		156,406	100.00

(5) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成14年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	270,156,000		第一種優先株式 20,000,000株 第二種優先株式 93,750,000株 第三種優先株式 156,406,000株
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	242,000		自己株式 普通株式 242,000株
完全議決権株式(その他)	807,447,000	807,447	普通株式 807,447,000株
単元未満株式	11,132,309		普通株式 11,132,059株 優先株式 250株
発行済株式総数	1,088,977,309		
総株主の議決権		807,447	

(注) 1 上記の「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構の株式が102,000株(議決権102個)含まれております。

2 「単元未満株式」の欄には、当社所有の自己株式654株が含まれております。

3 「総株主の議決権」の議決権の数(個)の欄には、証券保管振替機構の個数が102個含まれております。

【自己株式等】

平成14年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
三井トラスト・ホールディングス株式会社	東京都港区芝三丁目33番1号	242,000		242,000	0.00
計		242,000		242,000	0.00

(注) 株主名簿上の株式数と実質的に所有している株式数は一致しております。

2 【株価の推移】

(1) 普通株式

【当該中間会計期間における月別最高・最低株価】

月別	平成14年4月	5月	6月	7月	8月	9月
最高(円)	213	239	325	306	290	337
最低(円)	184	181	239	231	265	228

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 第一種優先株式

当株式は、証券取引所に上場されていません。

また、店頭売買有価証券として日本証券業協会に登録されていません。

(3) 第二種優先株式

当株式は、証券取引所に上場されていません。

また、店頭売買有価証券として日本証券業協会に登録されていません。

(4) 第三種優先株式

当株式は、証券取引所に上場されていません。

また、店頭売買有価証券として日本証券業協会に登録されていません。

3 【役員の様況】

(1) 新任役員

該当ありません。

(2) 退任役員

該当ありません。

(3) 役職の異動

該当ありません。

第5 【経理の状況】

- 1 当社の中間連結財務諸表は、改正後の「中間連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成11年大蔵省令第24号。以下「中間連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、改正後の「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当社の中間財務諸表は、改正後の「中間財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和52年大蔵省令第38号。以下「中間財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。
- 3 当中間連結会計期間(自平成14年4月1日 至平成14年9月30日)の中間連結財務諸表及び当中間会計期間(自平成14年4月1日 至平成14年9月30日)の中間財務諸表は、証券取引法第193条の2の規定に基づき、監査法人トーマツの監査証明を受けております。

1 【中間連結財務諸表等】

(1) 【中間連結財務諸表】

【中間連結貸借対照表】

区分	注記 番号	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)		前連結会計年度 の連結貸借対照表 (平成14年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
(資産の部)					
現金預け金		594,484	4.77	1,321,074	9.88
コールローン及び買入手形				96	0.00
買現先勘定		99,999	0.80	5,003	0.04
債券貸借取引支払保証金		4,620	0.04		
特定取引資産		13,650	0.11	12,186	0.09
金銭の信託		73,480	0.59	83,928	0.63
有価証券	1, 2,8	3,328,888	26.70	3,436,926	25.70
貸出金	3,4, 5,6,7, 8,9	7,238,607	58.05	7,416,077	55.46
外国為替		4,774	0.04	4,855	0.03
その他資産	8	317,486	2.54	299,746	2.24
動産不動産	8, 11,12	262,115	2.10	275,968	2.06
繰延税金資産		432,858	3.47	390,276	2.92
支払承諾見返		262,262	2.10	306,927	2.30
貸倒引当金		163,214	1.31	180,230	1.35
投資損失引当金				0	0.00
資産の部合計		12,470,011	100.00	13,372,836	100.00

区分	注記 番号	当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)		前連結会計年度 の連結貸借対照表 (平成14年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
(負債の部)					
預金	8	8,051,301	64.57	7,479,887	55.93
譲渡性預金		248,700	1.99	262,580	1.96
コールマネー及び売渡手形	8	161,400	1.29	586,500	4.39
債券貸借取引受入担保金	8	129,786	1.04		
特定取引負債		12,582	0.10	5,775	0.04
借入金	8, 13	429,091	3.44	434,810	3.25
外国為替		7	0.00	27	0.00
社債	14	138,902	1.11	123,130	0.92
転換社債	15			19,383	0.15
新株予約権付社債	15	3,255	0.03		
信託勘定借		2,416,348	19.38	3,085,291	23.07
その他負債	10	107,395	0.86	482,999	3.61
賞与引当金		3,641	0.03	4,080	0.03
退職給付引当金		1,679	0.01	8,645	0.07
債権売却損失引当金		7,490	0.06	7,167	0.05
特別法上の引当金				0	0.00
繰延税金負債		871	0.01	654	0.00
再評価に係る繰延税金負債	11	3,089	0.03	3,193	0.03
支払承諾		262,262	2.10	306,927	2.30
負債の部合計		11,977,806	96.05	12,811,054	95.80
(少数株主持分)					
少数株主持分		68,037	0.55	65,600	0.49
(資本の部)					
資本金				260,053	1.95
資本準備金	16			358,960	2.68
再評価差額金	11			4,939	0.04
欠損金	16			124,455	0.93
その他有価証券評価差額金				472	0.00
為替換算調整勘定				972	0.01
計				498,997	3.73
自己株式				9	0.00
子会社の所有する親会社株式				2,805	0.02
資本の部合計				496,181	3.71
資本金		260,067	2.08		
資本剰余金	16	227,325	1.82		
利益剰余金	16	41,008	0.33		
土地再評価差額金	11	4,740	0.04		
その他有価証券評価差額金		107,549	0.86		
為替換算調整勘定		938	0.01		
自己株式		486	0.00		
資本の部合計		424,167	3.40		
負債、少数株主持分 及び資本の部合計		12,470,011	100.00	13,372,836	100.00

【中間連結損益計算書】

区分	注記 番号	当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)		前連結会計年度の 要約連結損益計算書 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)	
		金額(百万円)	百分比 (%)	金額(百万円)	百分比 (%)
経常収益		258,249	100.00	532,120	100.00
信託報酬		50,362		104,118	
資金運用収益		84,570		192,784	
(うち貸出金利息)		(60,975)		(129,089)	
(うち有価証券利息配当金)		(22,798)		(60,823)	
役務取引等収益		28,141		57,686	
特定取引収益		274		645	
その他業務収益		37,568		53,640	
その他経常収益		57,333		123,245	
経常費用		222,900	86.31	862,204	162.03
資金調達費用		34,368		96,780	
(うち預金利息)		(15,451)		(37,487)	
役務取引等費用		1,754		6,861	
特定取引費用				223	
その他業務費用		600		2,142	
営業経費		80,033		172,967	
その他経常費用	1	106,142		583,229	
経常利益(は経常損失)		35,349	13.69	330,084	62.03
特別利益		2,409	0.93	8,615	1.62
特別損失	2	9,349	3.62	95,681	17.98
税金等調整前中間純利益 (は税金等調整前当期純損失)		28,409	11.00	417,149	78.39
法人税、住民税及び事業税		4,108	1.59	11,145	2.10
法人税等調整額		18,359	7.11	150,992	28.37
少数株主利益		1,780	0.69	599	0.11
中間純利益 (は当期純損失)		40,880	15.83	277,902	52.23

【中間連結剰余金計算書】

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度の 連結剰余金計算書 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
区分	注記 番号	金額(百万円)	金額(百万円)
連結剰余金期首残高			157,939
連結剰余金増加高			1,226
連結子会社の持分比率 変動による剰余金増加高			772
再評価差額金取崩額			453
連結剰余金減少高			5,719
連結子会社の減少に伴う 剰余金減少高			1,053
配当金			4,665
当期純損失			277,902
欠損金期末残高			124,455
(資本剰余金の部)			
資本剰余金期首残高		358,960	
資本剰余金増加高		14	
新株予約権の行使による 資本準備金増加高		14	
資本剰余金減少高		131,648	
資本準備金取崩額		131,648	
資本剰余金中間期末残高		227,325	
(利益剰余金の部)			
利益剰余金期首残高		124,455	
利益剰余金増加高		172,831	
中間純利益		40,880	
資本準備金取崩額		131,648	
土地再評価差額金取崩額		302	
利益剰余金減少高		7,366	
配当金		7,294	
自己株式処分差損		71	
利益剰余金中間期末残高		41,008	

【中間連結キャッシュ・フロー計算書】

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度の 連結キャッシュ・ フロー計算書 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
区分	注記 番号	金額(百万円)	金額(百万円)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
税金等調整前中間純利益 (は税金等調整前当期純損失)		28,409	417,149
減価償却費		24,357	50,842
連結調整勘定償却額			98
持分法による投資損益()		109	
貸倒引当金の増加額		12,682	41,936
投資損失引当金の増加額		0	190
債権売却損失引当金の増加額		322	1,578
賞与引当金の増加額		439	4,152
退職給付引当金の増加額		35,631	2,193
信託契約為替評価引当金の増加額			26,760
資金運用収益		84,570	192,784
資金調達費用		34,368	96,780
有価証券関係損益()		21,633	320,319
金銭の信託の運用損益()		877	457
為替差損益()		11,727	20,443
動産不動産処分損益()		1,338	3,304
特定取引資産の純増()減		1,464	4,420
特定取引負債の純増減()		6,807	568
貸出金の純増()減		177,469	312,269
預金の純増減()		571,413	50,517
譲渡性預金の純増減()		13,880	70,972
借入金(劣後特約付借入金を除く)の 純増減()		5,718	24,465
預け金(日銀預け金を除く)の純増()減		1,239	256,652

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度の 連結キャッシュ・ フロー計算書 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
区分	注記 番号	金額(百万円)	金額(百万円)
コールローン等の純増()減		94,900	175,164
債券借入取引担保金の純増()減			5,970
債券貸借取引支払保証金の純増()減		1,350	
コールマネー等の純増減()		425,100	534,988
債券貸付取引担保金の純増減()			247,362
債券貸借取引受入担保金の純増()減		117,575	
外国為替(資産)の純増()減		81	8,529
外国為替(負債)の純増減()		19	26
信託勘定借の純増減()		668,943	831,773
資金運用による収入		92,816	210,050
資金調達による支出		37,661	110,513
その他		155,296	33,579
小計		655,798	536,383
法人税等の支払額		9,736	4,573
営業活動によるキャッシュ・フロー		665,535	531,809
投資活動によるキャッシュ・フロー			
有価証券の取得による支出		3,797,088	3,276,648
有価証券の売却による収入		2,983,606	2,273,666
有価証券の償還による収入		751,053	1,539,248
金銭の信託の増加による支出		5,277	2,512
金銭の信託の減少による収入		17,296	17,251
動産不動産の取得による支出		18,051	46,406
動産不動産の売却による収入		12,952	15,030
連結範囲の変動を伴う 子会社株式の取得による支出			7,572
投資活動によるキャッシュ・フロー		55,509	512,056

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度の 連結キャッシュ・ フロー計算書 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
区分	注記 番号	金額(百万円)	金額(百万円)
財務活動によるキャッシュ・フロー			
劣後特約付社債・転換社債の償還による支出			11,984
株式等の発行による収入			57,100
配当金支払額		7,294	4,665
少数株主への配当金支払額		673	8
自己株式の取得による支出		1,712	
自己株式の売却による収入		2,860	202
財務活動によるキャッシュ・フロー		6,820	40,643
現金及び現金同等物に係る換算差額		34	351
現金及び現金同等物の増加額		727,829	1,084,861
現金及び現金同等物の期首残高		1,250,731	173,369
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額			7,499
現金及び現金同等物の中間期末(期末)残高		522,901	1,250,731

中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

	当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
1 連結の範囲に関する事項	<p>(1) 連結子会社 23社 主要な会社名 中央三井信託銀行株式会社 三井アセット信託銀行株式会社 MTH Preferred Capital 1 (Cayman) Limited MTH Preferred Capital 2 (Cayman) Limited</p> <p>(2) 非連結子会社 主要な会社名 中央三井クリエイト株式会社 非連結子会社は、その資産、経常収益、中間純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。</p>	<p>(1) 連結子会社 23社 主要な連結子会社名は、「第1企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。 なお、三井アセット信託銀行株式会社(旧社名「さくら信託銀行株式会社」)は株式取得により、Chuo Mitsui Investments, Inc.は設立により当連結会計年度から連結しております。 Chuo Mitsui Trust Company (U.S.A.)、中信住宅販売株式会社及び三信振興株式会社は、清算等により連結の範囲から除外しております。</p> <p>(2) 非連結子会社 主要な会社名 中央三井クリエイト株式会社 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)及び剰余金(持分に見合う額)からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。</p>
2 持分法の適用に関する事項	<p>(1) 持分法適用の非連結子会社 該当ありません。</p> <p>(2) 持分法適用の関連会社 2社 主要な会社名 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 日本トラスティ情報システム株式会社 なお、日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社及び日本トラスティ情報システム株式会社は株式取得により、当中間連結会計期間から持分法を適用しております。</p> <p>(3) 持分法非適用の非連結子会社 主要な会社名 中央三井クリエイト株式会社</p> <p>(4) 持分法非適用の関連会社 該当ありません。 持分法非適用の非連結子会社は、中間純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても中間連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。</p>	<p>(1) 持分法適用の非連結子会社 該当ありません。</p> <p>(2) 持分法適用の関連会社 該当ありません。</p> <p>(3) 持分法非適用の非連結子会社 主要な会社名 中央三井クリエイト株式会社</p> <p>(4) 持分法非適用の関連会社 該当ありません。 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び剰余金(持分に見合う額)からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。</p>

	当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)												
3 連結子会社の(中間)決算日等に関する事項	<p>(1) 連結子会社の中間決算日は次のとおりであります。</p> <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>1月24日</td> <td>2社</td> </tr> <tr> <td>6月末日</td> <td>6社</td> </tr> <tr> <td>9月末日</td> <td>15社</td> </tr> </table> <p>(2) 1月24日を中間決算日とする子会社については、9月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表により、またその他の子会社については、それぞれの中間決算日の財務諸表により連結しております。</p> <p>中間連結決算日と上記の中間決算日等との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。</p>	1月24日	2社	6月末日	6社	9月末日	15社	<p>(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。</p> <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>7月24日</td> <td>2社</td> </tr> <tr> <td>12月末日</td> <td>6社</td> </tr> <tr> <td>3月末日</td> <td>15社</td> </tr> </table> <p>(2) 7月24日を決算日とする子会社については、3月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表により、またその他の子会社については、それぞれの決算日の財務諸表により連結しております。</p> <p>連結決算日と上記の決算日等との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。</p>	7月24日	2社	12月末日	6社	3月末日	15社
1月24日	2社													
6月末日	6社													
9月末日	15社													
7月24日	2社													
12月末日	6社													
3月末日	15社													
4 資本連結手続に関する事項	<p>中央三井信託銀行株式会社は、平成14年2月1日に株式移転制度を利用して単独完全親会社である三井トラスト・ホールディングス株式会社を設立いたしました。</p> <p>この単独完全親会社設立に関する資本連結手続は「株式交換及び株式移転制度を利用して完全親子会社関係を創設する場合の資本連結手続」(日本公認会計士協会会計制度委員会研究報告第6号)に準拠し、企業集団の経済的実態には変化がないものとして持分プーリング法に準じた資本連結手続を行っております。</p>	同 左												
5 会計処理基準に関する事項	<p>(1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準</p> <p>金利、通貨の価格、有価証券市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的(以下「特定取引目的」)の取引については、取引の約定時点を基準とし、中間連結貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を中間連結損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。</p> <p>特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については中間連結決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については中間連結決算日において決済したものとみなした額により行っております。</p> <p>また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、当中間連結会計期間中の受払利息等に、有価証券、金銭債権等については前連結会計年度末と当中間連結会計期間末におけ</p>	<p>(1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準</p> <p>金利、通貨の価格、有価証券市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的(以下「特定取引目的」)の取引については、取引の約定時点を基準とし、連結貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を連結損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。</p> <p>特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については連結決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については連結決算日において決済したものとみなした額により行っております。</p> <p>また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、連結会計年度中の受払利息等に、有価証券、金銭債権等については前連結会計年度末と当連結会計年度末における評価損益の増減額を、派生商品については前</p>												

	<p style="text-align: center;">当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)</p>	<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)</p>
	<p>る評価損益の増減額を、派生商品については前連結会計年度末と当中間連結会計期間末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。</p>	<p>連結会計年度末と当連結会計年度末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。</p>
	<p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法 (イ)有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の非連結子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式及び投資信託受益証券については中間連結決算日前1ヵ月の市場価格の平均等、それ以外については中間連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、時価のないものについては移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。 なお、その他有価証券の評価差額については、全部資本直入法により処理しております。 (ロ)金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価は、上記(1)及び(2)(イ)と同じ方法により行っております。</p>	<p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法 (イ)有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の非連結子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式及び投資信託受益証券については連結決算日前1ヵ月の市場価格の平均、それ以外については連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、時価のないものについては移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。 なお、その他有価証券の評価差額については、全部資本直入法により処理しております。 (ロ) 同 左</p>
	<p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法 デリバティブ取引(特定取引目的の取引を除く)の評価は、時価法により行っております。</p>	<p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法 同 左</p>
	<p>(4) 減価償却の方法 動産不動産 信託銀行連結子会社の動産不動産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については、定額法)を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。 なお、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物 10年～50年 動産 3年～8年 また、取得価額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等償却する方法を採用しております。 その他の連結子会社の動産不動産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定額法により償却しております。</p>	<p>(4) 減価償却の方法 動産不動産 信託銀行連結子会社の動産不動産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については、定額法)を採用しております。 なお、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物 10年～50年 動産 3年～8年 また、取得価額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等償却する方法を採用しております。 その他の連結子会社の動産不動産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定額法により償却しております。</p>

	<p style="text-align: center;">当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)</p>	<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)</p>
	<p style="text-align: center;">ソフトウェア 自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づく定額法により償却しております。</p>	<p style="text-align: center;">ソフトウェア 同 左</p>
	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準 主要な国内連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)の債権については、下記直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。なお、特定海外債権については、対象国の政治経済情勢等に起因して生ずる損失見込額を特定海外債権引当勘定として計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、各営業店及び審査各々が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部が査定方法等の適正性を監査し、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は482,524百万円であります。</p>	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準 主要な国内連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。 破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)の債権については、下記直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。なお、特定海外債権については、対象国の政治経済情勢等に起因して生ずる損失見込額を特定海外債権引当勘定(租税特別措置法第55条の2の海外投資等損失準備金を含む。)として計上しております。 すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、各営業店及び審査各々が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部が査定方法等の適正性を監査し、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。 なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は514,651百万円であります。</p>

	<p style="text-align: center;">当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)</p>	<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)</p>
	<p>その他の連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引き当てております。</p>	<p>その他の連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引き当てております。</p>
		<p>(6) 投資損失引当金の計上基準 投資損失引当金は、投資に対する損失に備えるため、有価証券発行会社の財政状態等を勘案して必要と認められる額を計上しております。</p>
<p>(6) 賞与引当金の計上基準 賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当中間連結会計期間に帰属する額を計上しております。</p>		<p>(7) 賞与引当金の計上基準 賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。</p>
<p>(7) 退職給付引当金の計上基準 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当中間連結会計期間末において発生していると認められる額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(5年)による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から費用処理 なお、会計基準変更時差異(57,093百万円)については、5年による按分額を費用処理することとし、当中間連結会計期間においては同按分額に12分の6を乗じた額を計上しております。</p>		<p>(8) 退職給付引当金の計上基準 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(5年)による定額法により損益処理 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から費用処理 なお、会計基準変更時差異(57,093百万円)については、5年による按分額を費用処理しております。</p>
<p>(8) 債権売却損失引当金の計上基準 (株)共同債権買取機構に売却した不動産担保付債権の担保価値を勘案し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。</p>		<p>(9) 債権売却損失引当金の計上基準 同 左</p>

	<p style="text-align: center;">当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)</p>	<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)</p>
	<p>(9) 外貨建資産・負債の換算基準 信託銀行連結子会社の外貨建資産・負債については、取得時の為替相場による円換算額を付す非連結子会社株式を除き、主として中間連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。 その他の連結子会社の外貨建資産・負債については、それぞれの中間決算日等の為替相場により円換算しております。</p>	<p>(10) 特別法上の引当金の計上基準 特別法上の引当金は、次のとおり計上しております。 証券取引責任準備金 0百万円 証券先物取引等に関して生じた事故による損失の補てんに充てるため、証券取引法第65条の2第7項において準用する同法第51条及び金融機関の証券業務に関する内閣府令第32条に定めるところにより算出した額を計上しております。</p> <p>(11) 外貨建資産・負債の換算基準 信託銀行連結子会社の外貨建資産・負債については、取得時の為替相場による円換算額を付す非連結子会社株式を除き、主として連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。 資金関連スワップ取引については、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第20号)にもとづき、債権元本相当額および債務元本相当額の連結決算日の為替相場による正味の円換算額を連結貸借対照表に計上し、異種通貨間の金利差を反映した直先差金は直物外国為替取引の決済日の属する期から先物外国為替取引の決済日の属する期までの期間にわたり発生主義により連結損益計算書に計上するとともに、連結決算日の未収収益または未払費用を計上しております。 なお、資金関連スワップ取引とは、異なる通貨での資金調達・運用を動機として行われ、当該資金の調達または運用に係る元本相当額を直物買為替または直物売為替とし、当該元本相当額に将来支払うべきまたは支払を受けるべき金額・期日の確定している外貨相当額を含めて先物買為替または先物売為替とした為替スワップ取引であります。 また、異なる通貨での資金調達・運用を動機とし、契約締結時における元本相当額の支払額または受取額と通貨スワップ契約満了時における元本相当額を受取額または支払額が同額で、かつ、元本部分と金利部分に適用されるスワップレートが合理的なレートである直先フラット型の通貨スワップ取引(利息相当額の支払日毎にその時点の実勢為替相場を反映して一方の通貨の元本相当額を</p>

	当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
		<p>更改し、かつ、各利払期間毎に直先フラットである通貨スワップ取引を含む)については、日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第20号にもとづき、債権元本相当額および債務元本相当額の連結決算日の為替相場による正味の円換算額を連結貸借対照表に計上し、交換利息相当額はその期間にわたり発生主義により連結損益計算書に計上するとともに、連結決算日の未収収益または未払費用を計上しております。</p> <p>その他の連結子会社の外貨建資産・負債については、それぞれの決算日等の為替相場により換算しております。</p>
	<p>(10)リース取引の処理方法 当社及び国内連結子会社のリース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。</p>	<p>(12)リース取引の処理方法 同 左</p>
	<p>(11)重要なヘッジ会計の方法 信託銀行連結子会社のヘッジ会計の方法は、一部の資産・負債について、繰延ヘッジ、時価ヘッジあるいは金利スワップの特例処理を行っております。 その他の連結子会社のヘッジ会計の方法は、金利スワップの特例処理を行っております。</p>	<p>(13)重要なヘッジ会計の方法 同 左</p>
	<p>(12)消費税等の会計処理 当社及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。 ただし、動産不動産に係る控除対象外消費税等は、当中間連結会計期間の費用に計上しております。</p>	<p>(14)消費税等の会計処理 当社及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。 ただし、動産不動産に係る控除対象外消費税等は、当連結会計年度の費用に計上しております。</p>
6 (中間)連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲	<p>中間連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、中間連結貸借対照表上の「現金預け金」(信託銀行連結子会社は現金及び日本銀行への預け金)であります。</p>	<p>連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」(信託銀行連結子会社は現金及び日本銀行への預け金)であります。</p>

(会計方針の変更)

当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)
<p>従来、信託業務に係る費用はその発生した連結会計年度の費用として処理しておりましたが、当中間連結会計期間から年金・証券部門等の信託業務費用のうち個別の信託契約に対応する費用を信託報酬の属する連結会計年度の費用として処理する方法に変更しました。この変更は、平成14年3月の当社子会社の会社分割に伴って年金・証券部門等の個別の信託契約に対応する信託業務費用を適切に把握する体制が当中間連結会計期間に整備され、信託報酬との対応関係が明確になったことから、期間損益をより合理的に算定することを目的としたものであります。</p> <p>この変更により、従来の方法によった場合に比べ、経常利益及び税金等調整前中間純利益はそれぞれ3,949百万円増加し、中間純利益は2,133百万円増加しております。</p>	

(追加情報)

当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)
<p>(金融商品会計)</p> <p>現金担保付債券貸借取引については、従来、現金を担保とする債券貸借取引として、担保金を「その他資産」中債券借入取引担保金及び「その他負債」中債券貸付取引担保金で処理しておりましたが、当中間連結会計期間から、「金融商品会計に関する実務指針」(日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号)にもとづき、有価証券を担保とする資金取引として「債券貸借取引支払保証金」及び「債券貸借取引受入担保金」で処理しております。なお、この変更に伴い、従来の方法によった場合に比べ、「その他資産」は4,620百万円、「その他負債」は129,786百万円減少し、「債券貸借取引支払保証金」、「債券貸借取引受入担保金」はそれぞれ同額増加しております。</p>	
<p>(外貨建取引等会計基準)</p> <p>信託銀行連結子会社は、従来、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第20号)を適用しておりましたが、当中間連結会計期間から、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)を適用しております。</p> <p>なお、当中間連結会計期間は、日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号に規定する経過措置を適用し、「資金関連スワップ取引」、「通貨スワップ取引」及び「インターナル・コントラクト及び連結会社間取引の取扱い」については、従前の方法により会計処理しております。また、先物為替取引等に係る円換算差金については、中間連結貸借対照表上、相殺表示しております。</p> <p>資金関連スワップ取引については、日本公認会計士協</p>	

<p style="text-align: center;">当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)</p>	<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)</p>
<p>会業種別監査委員会報告第25号に規定する経過措置に基づき、債権元本相当額及び債務元本相当額の間中間連結決算日の為替相場による正味の円換算額を中間連結貸借対照表に計上し、異種通貨間の金利差を反映した直先差金は直物外国為替取引の決済日の属する期から先物外国為替取引の決済日の属する期までの期間にわたり発生主義により中間連結損益計算書に計上するとともに、中間連結決算日の未収収益又は未払費用を計上しております。</p> <p>なお、資金関連スワップ取引とは、異なる通貨での資金調達・運用を動機として行われ、当該資金の調達又は運用に係る元本相当額を直物買為替又は直物売為替とし、当該元本相当額に将来支払うべき又は支払を受けるべき金額・期日の確定している外貨相当額を含めて先物買為替又は先物売為替とした為替スワップ取引であります。</p> <p>異なる通貨での資金調達・運用を動機とし、契約締結時における元本相当額の支払額又は受取額と通貨スワップ契約満了時における元本相当額の受取額又は支払額が同額で、かつ、元本部分と金利部分に適用されるスワップレートが合理的なレートである直先フラット型の通貨スワップ取引(利息相当額の支払日ごとにその時点の実勢為替相場を反映して一方の通貨の元本相当額を更改し、かつ、各利払期間ごとに直先フラットである通貨スワップ取引を含む)については、日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号に規定する経過措置に基づき、債権元本相当額及び債務元本相当額の間中間連結決算日の為替相場による正味の円換算額を中間連結貸借対照表に計上し、交換利息相当額はその期間にわたり発生主義により中間連結損益計算書に計上するとともに、中間連結決算日の未収収益又は未払費用を計上しております。</p>	
<p>(自己株式及び法定準備金取崩等会計基準)</p> <p>当中間連結会計期間から、「自己株式及び法定準備金の取崩等に関する会計基準」(企業会計基準委員会平成14年 2月21日)を適用しております。これによる当中間連結会計期間の資産及び資本に与える影響は軽微であります。</p> <p>なお、中間連結財務諸表規則及び銀行法施行規則の改正により、当中間連結会計期間における中間連結貸借対照表の資本の部及び中間連結剰余金計算書については、改正後の中間連結財務諸表規則及び銀行法施行規則により作成しております。</p>	
	<p>信託銀行連結子会社の東京都に係る事業税の課税標準については、「東京都における銀行業等に対する事業税の課税標準等の特例に関する条例」(平成12年 4月 1日 東京都条例第145号)(以下都条例)が施行されたことに伴い、従来の所得から業務粗利益に変更になりました。</p> <p>平成12年10月18日、中央三井信託銀行株式会社は、東京都及び東京都知事を被告として、都条例の無効確認等を求めて東京地方裁判所に提訴し、平成14年 3月26日、東京地方裁判所は、都条例が違法無効であることを理由として、誤納金4,191百万円及び損害賠償金100百万円の請求を認める判決を言い渡しましたが、3月29日、東京都は、判決を不服とし、東京高等裁判所に控訴しております。</p>

<p>当中間連結会計期間 (自 平成14年 4月 1日 至 平成14年 9月30日)</p>	<p>前連結会計年度 (自 平成13年 4月 1日 至 平成14年 3月31日)</p>
	<p>このように同社は都条例が違憲・違法であると考え、その旨を訴訟において主張して係争中であり、当連結会計年度における会計処理については、東京都に係る事業税を都条例に基づく外形標準課税基準による事業税として処理しているものの、これは、現時点ではこの会計処理を継続適用することが適当であると判断されるためであり、都条例を合憲・適法なものと認めたということではありません。上記条例施行に伴い、東京都に係る事業税については、当連結会計年度に3,531百万円をその他の経常費用に計上しており、所得が課税標準である場合に比べ経常損失は増加しております。また、当該事業税は税効果会計の計算に含められる税金でないため、所得が課税標準である場合に比べ、「繰延税金資産」は23,264百万円減少しました。また、「再評価に係る繰延税金負債」は194百万円減少し、「再評価差額金」は194百万円増加し、「その他有価証券評価差額金」は10百万円減少しております。</p> <p>また、信託銀行連結子会社の大阪府に係る事業税の課税標準についても、「大阪府における銀行業等に対する事業税の課税標準等の特例に関する条例」(平成12年 6月 9日大阪府条例第131号)(以下府条例)が施行されたことに伴い、業務粗利益になりました。</p> <p>平成14年 4月 4日に、中央三井信託銀行株式会社は、大阪府及び大阪府知事を被告として、府条例の無効確認等を求めて大阪地方裁判所に提訴しました。</p> <p>このように同社は府条例が違憲・違法であると考え、その旨を訴訟において主張して係争中であり、当連結会計年度における会計処理については、大阪府に係る事業税を府条例に基づく外形標準課税基準による事業税として処理しているものの、これは現時点では東京都と同様の会計処理を適用することが適当であると判断されるためであり、府条例を合憲・適法なものと認めたということではありません。上記条例施行に伴い、大阪府に係る事業税については、568百万円をその他の経常費用に計上しており、所得が課税標準である場合に比べ、経常損失は同額増加しております。また、当該事業税は税効果会計の計算に含められる税金でないため、所得が課税標準である場合に比べ、「繰延税金資産」は3,744百万円減少しました。また、「再評価に係る繰延税金負債」は31百万円減少し、「再評価差額金」は31百万円増加し、「その他有価証券評価差額金」は1百万円減少しております。</p> <p>なお、大阪府に係る事業税については、平成14年 5月 30日に上記府条例の「一部を改正する条例」(平成14年大阪府条例第77号)(以下改正府条例)が施行されたことにより、府条例による課税標準等の特例が平成14年 4月 1日以後開始する事業年度より適用されることとなりました。これにより、当事業年度に係る大阪府に対する事業税については、改正府条例附則 2の適用を受け、同社の場合、外形標準課税基準と所得基準のうち低い額となる、所得を課税標準として計算される額を申告・納付する予定であります。ただし、この申告・納付によって、府条例並びに改正府条例を合憲・適法なものと認めたということではありません。</p>

注記事項

(中間連結貸借対照表関係)

当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	前連結会計年度末 (平成14年3月31日)
<p>1 有価証券には、非連結子会社及び関連会社の株式19,988百万円を含んでおります。</p> <p>2 使用貸借又は貸借契約により貸し付けている有価証券は、「有価証券」中の国債に570百万円含まれております。 現先取引並びに現金担保付債券貸借取引等により受け入れている有価証券で当中間連結会計期間末に所有しているものは104,355百万円であります。これらは売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有する有価証券ですが、当中間連結会計期間末においては当該処分をせずにすべて所有しております。</p> <p>3 貸出金のうち、破綻先債権額は36,742百万円、延滞債権額は362,087百万円であります。但し、上記債権額のうち、最終処理につながる措置である㈱整理回収機構への管理信託方式による処理分は、12,953百万円であります。 なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。 また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>4 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は751百万円であります。 なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>5 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は357,282百万円あります。 なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p>	<p>1 有価証券には、非連結子会社の株式2,923百万円を含んでおります。</p> <p>2 消費貸借契約(債券貸借取引及び現金担保付債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に209,678百万円、その他の証券に38,199百万円含まれております。また、使用貸借または貸借契約により貸し付けている有価証券は、「有価証券」中の国債に603百万円含まれております。 現先取引並びに現金担保付債券貸借取引により受け入れている譲渡性預け金及び有価証券で当連結会計年度末に所有しているものは、それぞれ5,003百万円、5,202百万円であります。これらは売却または再担保という方法で自由に処分できる権利を有する有価証券等ですが、当連結会計年度末においては当該処分をせずにすべて所有しております。</p> <p>3 貸出金のうち、破綻先債権額は36,953百万円、延滞債権額は337,880百万円あります。但し、上記債権額のうち、最終処理につながる措置である㈱整理回収機構への管理信託方式による処理分は、3,012百万円あります。 なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。 また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>4 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は1,519百万円あります。 なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>5 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は452,895百万円あります。 なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p>

当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	前連結会計年度末 (平成14年3月31日)																														
<p>6 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は756,865百万円であります。但し、上記債権額のうち、最終処理につながる措置である(株)整理回収機構への管理信託方式による処理分は、12,953百万円であります。</p> <p>なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>7 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、33,302百万円であります。</p> <p>8 担保に供している資産は次のとおりであります。</p> <p>担保に供している資産</p> <table border="0" data-bbox="225 779 767 875"> <tr> <td>有価証券</td> <td>622,588百万円</td> </tr> <tr> <td>貸出金</td> <td>424,648百万円</td> </tr> <tr> <td>その他資産</td> <td>976百万円</td> </tr> </table> <p>担保資産に対応する債務</p> <table border="0" data-bbox="225 909 767 1070"> <tr> <td>預金</td> <td>7,700百万円</td> </tr> <tr> <td>コールマネー</td> <td>160,000百万円</td> </tr> <tr> <td>売渡手形</td> <td>1,400百万円</td> </tr> <tr> <td>債券貸借取引受入担保金</td> <td>129,786百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>15,445百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済、デリバティブ等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として有価証券486,527百万円、その他資産(手形交換保証金)15百万円を差し入れております。</p> <p>なお、動産不動産のうち保証金権利金は19,471百万円、その他資産のうち先物取引差入証拠金等は360百万円であります。</p> <p>9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は1,390,025百万円であります。このうち契約残存期間が1年以内のものが1,376,490百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全、その他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶または契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p>	有価証券	622,588百万円	貸出金	424,648百万円	その他資産	976百万円	預金	7,700百万円	コールマネー	160,000百万円	売渡手形	1,400百万円	債券貸借取引受入担保金	129,786百万円	借入金	15,445百万円	<p>6 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は829,248百万円であります。但し、上記債権額のうち、最終処理につながる措置である(株)整理回収機構への管理信託方式による処理分は、3,012百万円であります。</p> <p>なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>7 手形割引により取得した商業手形の額面金額は、48,592百万円であります。</p> <p>8 担保に供している資産は次のとおりであります。</p> <p>担保に供している資産</p> <table border="0" data-bbox="853 779 1396 875"> <tr> <td>有価証券</td> <td>626,309百万円</td> </tr> <tr> <td>貸出金</td> <td>484,734百万円</td> </tr> <tr> <td>その他資産</td> <td>976百万円</td> </tr> </table> <p>担保資産に対応する債務</p> <table border="0" data-bbox="853 909 1396 1039"> <tr> <td>預金</td> <td>287百万円</td> </tr> <tr> <td>コールマネー</td> <td>230,000百万円</td> </tr> <tr> <td>売渡手形</td> <td>356,500百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>15,989百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済、デリバティブ等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として有価証券443,107百万円、その他資産(手形交換保証金)15百万円を差し入れております。</p> <p>なお、動産不動産のうち保証金権利金は20,121百万円、その他資産のうち先物取引差入証拠金等は284百万円、債券借入取引担保金は5,970百万円であります。</p> <p>9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は1,479,445百万円あります。このうち契約残存期間が1年以内のものが1,471,573百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全、その他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶または契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p>	有価証券	626,309百万円	貸出金	484,734百万円	その他資産	976百万円	預金	287百万円	コールマネー	230,000百万円	売渡手形	356,500百万円	借入金	15,989百万円
有価証券	622,588百万円																														
貸出金	424,648百万円																														
その他資産	976百万円																														
預金	7,700百万円																														
コールマネー	160,000百万円																														
売渡手形	1,400百万円																														
債券貸借取引受入担保金	129,786百万円																														
借入金	15,445百万円																														
有価証券	626,309百万円																														
貸出金	484,734百万円																														
その他資産	976百万円																														
預金	287百万円																														
コールマネー	230,000百万円																														
売渡手形	356,500百万円																														
借入金	15,989百万円																														

当中間連結会計期間末 (平成14年9月30日)	前連結会計年度末 (平成14年3月31日)
<p>10 ヘッジ手段に係る損益または評価差額は、繰延ヘッジ利益としてその他負債に含めて計上しております。なお、上記の繰延ヘッジ利益の総額は237百万円であり、繰延ヘッジ損失はありません。</p> <p>11 中央三井信託銀行株式会社が三井信託銀行株式会社から継承した土地については、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として資本の部に計上しております。</p> <p>再評価を行った年月日 平成10年3月31日</p> <p>同法律第3条第3項に定める再評価の方法 土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第1号に定める標準地の公示価格、同条第2号に定める基準地の標準価格及び同条第3号に定める当該事業用土地の課税台帳に登録されている価格に基づいて、合理的な調整(時点修正、地域格差及び個別格差の補正)を行って算出しております。</p> <p>同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の当中間連結会計期間末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額 8,201百万円</p> <p>12 動産不動産の減価償却累計額 215,793百万円</p> <p>13 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金368,000百万円が含まれております。</p> <p>14 社債は、永久劣後特約付社債116,100百万円及び劣後特約付社債22,802百万円であります。</p> <p>15 新株予約権付社債は、永久劣後特約付転換社債2,630百万円及び劣後特約付転換社債625百万円であります。</p> <p>16 中央三井信託銀行株式会社は、商法第289条第2項及び銀行法第18条第2項の規定に基づき、当中間連結会計期間中に資本準備金を取り崩しております。これに伴い、資本剰余金は131,648百万円減少し、利益剰余金が同額増加しております。</p> <p>17 信託銀行連結子会社の受託する信託のうち、元本補てん契約のある信託の元本金額は、金銭信託1,641,792百万円、貸付信託3,091,595百万円であります。</p>	<p>10 ヘッジ手段に係る損益または評価差額は、繰延ヘッジ利益としてその他負債に含めて計上しております。なお、上記の繰延ヘッジ利益の総額は302百万円であり、繰延ヘッジ損失はありません。</p> <p>11 中央三井信託銀行株式会社が三井信託銀行株式会社から継承した土地については、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「再評価差額金」として資本の部に計上しております。</p> <p>再評価を行った年月日 平成10年3月31日</p> <p>同法律第3条第3項に定める再評価の方法 土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布 政令第119号)第2条第1号に定める標準地の公示価格、同条第2号に定める基準地の標準価格及び同条第3号に定める当該事業用土地の課税台帳に登録されている価格に基づいて、合理的な調整(時点修正、地域格差及び個別格差の補正)を行って算出しております。</p> <p>同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額 6,418百万円</p> <p>12 動産不動産の減価償却累計額 212,629百万円</p> <p>13 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金368,000百万円が含まれております。</p> <p>14 社債は、永久劣後特約付社債100,000百万円及び劣後特約付社債23,130百万円であります。</p> <p>15 転換社債は、永久劣後特約付転換社債18,730百万円及び劣後特約付転換社債653百万円であります。</p> <p>17 信託銀行連結子会社の受託する信託のうち、元本補てん契約のある信託の元本金額は、合同運用指定金銭信託1,153,272百万円、貸付信託4,118,731百万円であります。</p>

(中間連結損益計算書関係)

<p>当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)</p>	<p>前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)</p>
<p>1 その他経常費用には、貸出金償却22,578百万円、貸倒引当金繰入額2,069百万円、株式等償却35,983百万円を含んでおります。</p> <p>2 特別損失には、退職給付会計導入に伴う会計基準変更時差異の費用処理額5,709百万円、動産不動産処分損1,948百万円を含んでおります。</p>	<p>1 その他経常費用には、元本補てん契約のある信託財産に対する契約履行に伴う損失45,307百万円、貸出金償却42,700百万円、株式等償却157,976百万円を含んでおります。</p> <p>2 特別損失には、証券投資信託を期限前解約したことに伴い発生した解約差損78,567百万円、証券投資信託の減損処理額1,416百万円、退職給付会計導入に伴う会計基準変更時差異の費用処理額11,418百万円を含んでおります。</p>

(中間連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)																																						
<p>1 現金及び現金同等物の中間期末残高と中間連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係</p> <p>平成14年9月30日現在</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">現金預け金勘定</td> <td style="text-align: right;">594,484百万円</td> </tr> <tr> <td>信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)</td> <td style="text-align: right;">71,582百万円</td> </tr> <tr> <td>現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">522,901百万円</td> </tr> </table>	現金預け金勘定	594,484百万円	信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)	71,582百万円	現金及び現金同等物	522,901百万円	<p>1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係</p> <p>平成14年3月31日現在</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">現金預け金勘定</td> <td style="text-align: right;">1,321,074百万円</td> </tr> <tr> <td>信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)</td> <td style="text-align: right;">70,342百万円</td> </tr> <tr> <td>現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">1,250,731百万円</td> </tr> </table> <p>2 株式の取得により新たに連結子会社となった三井アセット信託銀行株式会社の資産及び負債の主な内訳</p> <p>株式の取得により新たに三井アセット信託銀行株式会社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の主な内訳並びに同社株式の取得価額と同社取得のための支出(純額)との関係は次のとおりであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">有価証券</td> <td style="text-align: right;">14,985百万円</td> </tr> <tr> <td>貸出金</td> <td style="text-align: right;">13,380百万円</td> </tr> <tr> <td>預金</td> <td style="text-align: right;">2,518百万円</td> </tr> <tr> <td>コールマネー</td> <td style="text-align: right;">14,100百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td style="text-align: right;">2,000百万円</td> </tr> <tr> <td>上記以外の資産及び負債</td> <td style="text-align: right;">554百万円</td> </tr> <tr> <td>連結調整勘定</td> <td style="text-align: right;">98百万円</td> </tr> <tr> <td>同社株式の取得価額</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">10,400百万円</td> </tr> <tr> <td>同社現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black;">2,827百万円</td> </tr> <tr> <td>差引：同社株式取得のための支出</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">7,572百万円</td> </tr> </table> <p>3 重要な非資金取引の内容</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">転換社債の転換による資本金増加額</td> <td style="text-align: right;">430百万円</td> </tr> <tr> <td>転換社債の転換による資本準備金増加額</td> <td style="text-align: right;">430百万円</td> </tr> <tr> <td>転換による転換社債減少額</td> <td style="text-align: right; border-top: 1px solid black; border-bottom: 3px double black;">860百万円</td> </tr> </table>	現金預け金勘定	1,321,074百万円	信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)	70,342百万円	現金及び現金同等物	1,250,731百万円	有価証券	14,985百万円	貸出金	13,380百万円	預金	2,518百万円	コールマネー	14,100百万円	借入金	2,000百万円	上記以外の資産及び負債	554百万円	連結調整勘定	98百万円	同社株式の取得価額	10,400百万円	同社現金及び現金同等物	2,827百万円	差引：同社株式取得のための支出	7,572百万円	転換社債の転換による資本金増加額	430百万円	転換社債の転換による資本準備金増加額	430百万円	転換による転換社債減少額	860百万円
現金預け金勘定	594,484百万円																																						
信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)	71,582百万円																																						
現金及び現金同等物	522,901百万円																																						
現金預け金勘定	1,321,074百万円																																						
信託銀行連結子会社の預け金 (日本銀行への預け金を除く)	70,342百万円																																						
現金及び現金同等物	1,250,731百万円																																						
有価証券	14,985百万円																																						
貸出金	13,380百万円																																						
預金	2,518百万円																																						
コールマネー	14,100百万円																																						
借入金	2,000百万円																																						
上記以外の資産及び負債	554百万円																																						
連結調整勘定	98百万円																																						
同社株式の取得価額	10,400百万円																																						
同社現金及び現金同等物	2,827百万円																																						
差引：同社株式取得のための支出	7,572百万円																																						
転換社債の転換による資本金増加額	430百万円																																						
転換社債の転換による資本準備金増加額	430百万円																																						
転換による転換社債減少額	860百万円																																						

(リース取引関係)

当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)																																																																																				
<p>1 借主側</p> <p>(1) リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び中間連結会計期間末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">取得価額相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">176百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">5百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">182百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">減価償却累計額相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">128百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">4百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">133百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">中間連結会計期間末残高相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">47百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">0百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">48百万円</td> </tr> ・未経過リース料中間連結会計期間末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">37百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">11百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">49百万円</td> </tr> </table> ・支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">21百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">18百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">支払利息相当額</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> </table> ・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 ・利息相当額の算定方法 リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各中間連結会計期間への配分方法については、利息法によっております。 <p>(2) オペレーティング・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未経過リース料 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">4百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">8百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">13百万円</td> </tr> </table> </table>	取得価額相当額		動産	176百万円	その他	5百万円	合計	182百万円	減価償却累計額相当額		動産	128百万円	その他	4百万円	合計	133百万円	中間連結会計期間末残高相当額		動産	47百万円	その他	0百万円	合計	48百万円	1年内	37百万円	1年超	11百万円	合計	49百万円	支払リース料	21百万円	減価償却費相当額	18百万円	支払利息相当額	1百万円	1年内	4百万円	1年超	8百万円	合計	13百万円	<p>1 借主側</p> <p>(1) リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び年度末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">取得価額相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">186百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">5百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">191百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">減価償却累計額相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">119百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">3百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">123百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">年度末残高相当額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">66百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">1百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">68百万円</td> </tr> ・未経過リース料年度末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">41百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">35百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">76百万円</td> </tr> </table> ・支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">支払リース料</td> <td style="text-align: right;">117百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費相当額</td> <td style="text-align: right;">87百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">支払利息相当額</td> <td style="text-align: right;">9百万円</td> </tr> </table> ・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 ・利息相当額の算定方法 リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各連結会計年度への配分方法については、利息法によっております。 <p>(2) オペレーティング・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未経過リース料 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">4百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">4百万円</td> </tr> </table> </table>	取得価額相当額		動産	186百万円	その他	5百万円	合計	191百万円	減価償却累計額相当額		動産	119百万円	その他	3百万円	合計	123百万円	年度末残高相当額		動産	66百万円	その他	1百万円	合計	68百万円	1年内	41百万円	1年超	35百万円	合計	76百万円	支払リース料	117百万円	減価償却費相当額	87百万円	支払利息相当額	9百万円	1年内	4百万円	1年超	百万円	合計	4百万円
取得価額相当額																																																																																					
動産	176百万円																																																																																				
その他	5百万円																																																																																				
合計	182百万円																																																																																				
減価償却累計額相当額																																																																																					
動産	128百万円																																																																																				
その他	4百万円																																																																																				
合計	133百万円																																																																																				
中間連結会計期間末残高相当額																																																																																					
動産	47百万円																																																																																				
その他	0百万円																																																																																				
合計	48百万円																																																																																				
1年内	37百万円																																																																																				
1年超	11百万円																																																																																				
合計	49百万円																																																																																				
支払リース料	21百万円																																																																																				
減価償却費相当額	18百万円																																																																																				
支払利息相当額	1百万円																																																																																				
1年内	4百万円																																																																																				
1年超	8百万円																																																																																				
合計	13百万円																																																																																				
取得価額相当額																																																																																					
動産	186百万円																																																																																				
その他	5百万円																																																																																				
合計	191百万円																																																																																				
減価償却累計額相当額																																																																																					
動産	119百万円																																																																																				
その他	3百万円																																																																																				
合計	123百万円																																																																																				
年度末残高相当額																																																																																					
動産	66百万円																																																																																				
その他	1百万円																																																																																				
合計	68百万円																																																																																				
1年内	41百万円																																																																																				
1年超	35百万円																																																																																				
合計	76百万円																																																																																				
支払リース料	117百万円																																																																																				
減価償却費相当額	87百万円																																																																																				
支払利息相当額	9百万円																																																																																				
1年内	4百万円																																																																																				
1年超	百万円																																																																																				
合計	4百万円																																																																																				

当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)																																																																																				
<p>2 貸主側</p> <p>(1) リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リース物件の取得価額、減価償却累計額及び中間連結会計期間末残高 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">取得価額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">184,688百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">1,886百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">186,575百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">減価償却累計額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">111,748百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">895百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">112,643百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">中間連結会計期間末残高</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">72,940百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">991百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">73,931百万円</td> </tr> ・未経過リース料中間連結会計期間末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">26,501百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">52,864百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">79,365百万円</td> </tr> </table> ・受取リース料、減価償却費及び受取利息相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">受取リース料</td> <td style="text-align: right;">15,436百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費</td> <td style="text-align: right;">13,546百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">受取利息相当額</td> <td style="text-align: right;">682百万円</td> </tr> </table> ・利息相当額の算定方法 <p style="padding-left: 40px;">リース料総額と見積残存価額の合計額からリース物件の購入価額を控除した額を利息相当額とし、各中間連結会計期間への配分方法については、利息法によっております。</p> <p>(2) オペレーティング・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未経過リース料 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">494百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">1,097百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">1,592百万円</td> </tr> </table> </table>	取得価額		動産	184,688百万円	その他	1,886百万円	合計	186,575百万円	減価償却累計額		動産	111,748百万円	その他	895百万円	合計	112,643百万円	中間連結会計期間末残高		動産	72,940百万円	その他	991百万円	合計	73,931百万円	1年内	26,501百万円	1年超	52,864百万円	合計	79,365百万円	受取リース料	15,436百万円	減価償却費	13,546百万円	受取利息相当額	682百万円	1年内	494百万円	1年超	1,097百万円	合計	1,592百万円	<p>2 貸主側</p> <p>(1) リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リース物件の取得価額、減価償却累計額及び年度末残高 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2">取得価額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">179,737百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">1,939百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">181,677百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">減価償却累計額</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">106,049百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">881百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">106,931百万円</td> </tr> <tr> <td colspan="2">年度末残高</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">動産</td> <td style="text-align: right;">73,688百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">その他</td> <td style="text-align: right;">1,058百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">74,746百万円</td> </tr> ・未経過リース料年度末残高相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">26,646百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">54,421百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">81,068百万円</td> </tr> </table> ・受取リース料、減価償却費及び受取利息相当額 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">受取リース料</td> <td style="text-align: right;">30,533百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費</td> <td style="text-align: right;">26,606百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">受取利息相当額</td> <td style="text-align: right;">2,513百万円</td> </tr> </table> ・利息相当額の算定方法 <p style="padding-left: 40px;">リース料総額と見積残存価額の合計額からリース物件の購入価額を控除した額を利息相当額とし、各連結会計年度への配分方法については、利息法によっております。</p> <p>(2) オペレーティング・リース取引</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未経過リース料 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年内</td> <td style="text-align: right;">325百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">1年超</td> <td style="text-align: right;">676百万円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">合計</td> <td style="text-align: right;">1,001百万円</td> </tr> </table> </table>	取得価額		動産	179,737百万円	その他	1,939百万円	合計	181,677百万円	減価償却累計額		動産	106,049百万円	その他	881百万円	合計	106,931百万円	年度末残高		動産	73,688百万円	その他	1,058百万円	合計	74,746百万円	1年内	26,646百万円	1年超	54,421百万円	合計	81,068百万円	受取リース料	30,533百万円	減価償却費	26,606百万円	受取利息相当額	2,513百万円	1年内	325百万円	1年超	676百万円	合計	1,001百万円
取得価額																																																																																					
動産	184,688百万円																																																																																				
その他	1,886百万円																																																																																				
合計	186,575百万円																																																																																				
減価償却累計額																																																																																					
動産	111,748百万円																																																																																				
その他	895百万円																																																																																				
合計	112,643百万円																																																																																				
中間連結会計期間末残高																																																																																					
動産	72,940百万円																																																																																				
その他	991百万円																																																																																				
合計	73,931百万円																																																																																				
1年内	26,501百万円																																																																																				
1年超	52,864百万円																																																																																				
合計	79,365百万円																																																																																				
受取リース料	15,436百万円																																																																																				
減価償却費	13,546百万円																																																																																				
受取利息相当額	682百万円																																																																																				
1年内	494百万円																																																																																				
1年超	1,097百万円																																																																																				
合計	1,592百万円																																																																																				
取得価額																																																																																					
動産	179,737百万円																																																																																				
その他	1,939百万円																																																																																				
合計	181,677百万円																																																																																				
減価償却累計額																																																																																					
動産	106,049百万円																																																																																				
その他	881百万円																																																																																				
合計	106,931百万円																																																																																				
年度末残高																																																																																					
動産	73,688百万円																																																																																				
その他	1,058百万円																																																																																				
合計	74,746百万円																																																																																				
1年内	26,646百万円																																																																																				
1年超	54,421百万円																																																																																				
合計	81,068百万円																																																																																				
受取リース料	30,533百万円																																																																																				
減価償却費	26,606百万円																																																																																				
受取利息相当額	2,513百万円																																																																																				
1年内	325百万円																																																																																				
1年超	676百万円																																																																																				
合計	1,001百万円																																																																																				

(有価証券関係)

中間連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「特定取引資産」中の商品有価証券及びコマーシャル・ペーパーが含まれております。

当中間連結会計期間末

1 満期保有目的の債券で時価のあるもの(平成14年9月30日現在)

	中間連結貸借 対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
国債	61	61	0	0	
地方債					
社債	13,087	13,066	20	5	26
その他	959	963	3	3	
合計	14,108	14,091	16	10	26

(注) 1 時価は、当中間連結会計期間末日における市場価格等に基づいております。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

2 その他有価証券で時価のあるもの(平成14年9月30日現在)

	取得原価(百万円)	中間連結貸借 対照表計上額 (百万円)	評価差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
株式	1,162,290	1,025,829	136,460	33,645	170,106
債券	1,870,650	1,887,079	16,429	16,922	493
国債	1,663,133	1,672,171	9,037	9,454	416
地方債	55,079	59,051	3,972	3,972	0
社債	152,437	155,856	3,419	3,495	76
その他	242,146	231,231	10,914	2,264	13,179
合計	3,275,087	3,144,140	130,946	52,832	183,779

(注) 1 中間連結貸借対照表計上額は、株式ならびに投資信託受益証券については当中間連結会計期間末前1ヶ月の市場価格の平均等に基づいて算定された額により、また、それ以外については、当中間連結会計期間末日における市場価格等に基づく時価によりそれぞれ計上したものであります。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

3 当中間連結会計期間において、その他有価証券で時価のある株式等について33,741百万円の減損処理を行っております。

4 株式等の減損にあたっての「時価が著しく下落した」と判断する基準は、資産の自己査定基準において有価証券の発行会社の区分ごとに次のとおり定めております。

破綻先、実質破綻先、破綻懸念先	時価が取得原価に比べて下落
要注意先	時価が取得原価に比べて30%以上下落
正常先	時価が取得原価に比べて30%以上下落

上記自己査定基準の破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、要注意先ならびに正常先については時価が取得原価まで回復する見込みがないと判断し、減損処理を実施しております。ただし、正常先の時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落した銘柄については、個別に時価の回復可能性を判定し減損処理を実施しております。

なお、破綻先とは破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している発行会社、実質破綻先とはそれと同等の状況にある発行会社、破綻懸念先とは現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる発行会社、要注意先とは今後の管理に注意を要する発行会社、正常先とは、上記破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、要注意先以外の発行会社であります。

3 時価のない有価証券の内容及び中間連結貸借対照表計上額(平成14年9月30日現在)

	金額(百万円)
その他有価証券	
非上場株式(店頭売買株式を除く)	91,613
非上場外国証券	18,751
出資証券	6,386

前連結会計年度末

1 売買目的有価証券(平成14年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	前連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)
売買目的有価証券	5,065	1

2 満期保有目的の債券で時価のあるもの(平成14年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
国債	227	228	0	0	
地方債					
社債	12,683	12,626	56	5	61
その他					
合計	12,911	12,855	55	6	61

(注) 1 時価は、前連結会計年度末日における市場価格等に基づいております。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

3 その他有価証券で時価のあるもの(平成14年3月31日現在)

	取得原価(百万円)	連結貸借対照表計上額(百万円)	評価差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
株式	1,291,632	1,296,801	5,168	72,071	66,902
債券	1,489,816	1,495,205	5,388	9,426	4,037
国債	1,272,299	1,270,041	2,257	1,505	3,763
地方債	66,429	70,803	4,373	4,388	15
社債	151,087	154,360	3,272	3,531	258
その他	327,616	316,558	11,057	1,359	12,417
合計	3,109,065	3,108,565	500	82,857	83,357

(注) 1 連結貸借対照表計上額は、株式ならびに投資信託受益証券については前連結会計年度末前1ヵ月の市場価格の平均に基づいて算定された額により、また、それ以外については、前連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価によりそれぞれ計上したものであります。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

3 前連結会計年度において、その他有価証券で時価のある株式等について158,777百万円の減損処理を行っております。

4 株式等の減損にあたっての「時価が著しく下落した」と判断する基準は、資産の自己査定基準において有価証券の発行会社の区分ごとに次のとおり定めております。

破綻先、実質破綻先、破綻懸念先	時価が取得原価に比べて下落
要注意先	時価が取得原価に比べて30%以上下落
正常先	時価が取得原価に比べて30%以上下落

上記自己査定基準の破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、要注意先ならびに正常先については時価が取得原価まで回復する見込みがないと判断し、減損処理を実施しております。ただし、正常先の時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落した銘柄については、個別に時価の回復可能性を判定し減損処理を実施しております。

なお、破綻先とは破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している発行会社、実質破綻先とはそれと同等の状況にある発行会社、破綻懸念先とは現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる発行会社、要注意先とは今後の管理に注意を要する発行会社、正常先とは、上記破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、要注意先以外の発行会社であります。

4 当該連結会計年度中に売却したその他有価証券(自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)

	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
その他有価証券	2,337,789	49,930	225,775

5 時価のない有価証券の主な内容及び連結貸借対照表計上額(平成14年3月31日現在)

	金額(百万円)
その他有価証券	
非上場株式(店頭売買株式を除く)	48,958
非上場外国証券	24,742
出資証券	5,647

6 前連結会計年度中に、中央三井信託銀行株式会社は会社分割を踏まえたポートフォリオ運営の見直しにより、満期保有目的の債券の全額131,156百万円の保有区分を変更し、その他有価証券に区分しております。この変更により、有価証券及びその他有価証券評価差額金はそれぞれ3,930百万円、2,386百万円増加し、繰延税金資産は1,543百万円減少しております。

7 その他有価証券のうち満期があるもの及び満期保有目的の債券の償還予定額(平成14年3月31日現在)

	1年以内(百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超(百万円)
債券	78,749	392,596	921,158	115,612
国債	56,416	239,841	858,399	115,612
地方債	7,027	33,345	30,430	
社債	15,305	119,410	32,328	
その他	3,893	92,177	25,696	52,446
合計	82,643	484,773	946,854	168,058

(金銭の信託関係)

当中間連結会計期間末

1 満期保有目的の金銭の信託(平成14年9月30日現在)

該当ありません。

2 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)(平成14年9月30日現在)

	取得原価(百万円)	中間連結貸借 対照表計上額 (百万円)	評価差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
その他の金銭 の信託	6,508	10,675	4,166	4,166	

(注) 1 中間連結貸借対照表計上額は、当中間連結会計期間末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

前連結会計年度末

1 運用目的の金銭の信託(平成14年3月31日現在)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	前連結会計年度の損益に 含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	73,954	1,217

2 満期保有目的の金銭の信託(平成14年3月31日現在)

該当ありません。

3 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)(平成14年3月31日現在)

	取得原価(百万円)	連結貸借対照表 計上額(百万円)	評価差額(百万円)	うち益(百万円)	うち損(百万円)
その他の金銭 の信託	6,500	9,973	3,473	3,473	

(注) 1 連結貸借対照表計上額は、前連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

(その他有価証券評価差額金)

当中間連結会計期間末

その他有価証券評価差額金(平成14年9月30日現在)

中間連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額(百万円)
評価差額	127,759
その他有価証券	131,925
その他の金銭の信託	4,166
(+)繰延税金資産	21,970
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	105,789
()少数株主持分相当額	1,759
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	107,549

(注) 当中間連結会計期間末における時価がないその他有価証券に係る為替換算差額については、「評価差額」の内訳「その他有価証券」に含めて記載しております。

前連結会計年度末

その他有価証券評価差額金(平成14年3月31日現在)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額(百万円)
評価差額	2,973
その他有価証券	500
その他の金銭の信託	3,473
()繰延税金負債	1,263
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	1,709
()少数株主持分相当額	1,236
その他有価証券評価差額金	472

(デリバティブ取引関係)

当中間連結会計期間末

(1) 金利関連取引(平成14年9月30日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
店頭	金利先渡契約			
	金利スワップ	6,426,265	1,919	1,919
	金利オプション	107,489	3	35
	その他	149,000	2,429	637
	合計		4,353	1,246

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を中間連結損益計算書に計上しております。
なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引は、上記記載から除いております。

(2) 通貨関連取引(平成14年9月30日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
店頭	通貨スワップ			
	為替予約			
	通貨オプション			
	その他			

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を中間連結損益計算書に計上しております。なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引及び下記注2の取引は、上記記載から除いております。
2 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する経過措置に基づき、期間損益計算を行っている通貨スワップ取引については、上記記載から除いております。
期間損益計算を行っている通貨スワップ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
通貨スワップ	370,368	1,946	1,946

また、同様に、先物為替予約、通貨オプション等のうち、中間連結会計期間末日に引直しを行い、その損益を中間連結損益計算書に計上しているもの、及び外貨建金銭債権債務等に付されたもので当該外貨建金銭債権債務等の中間連結貸借対照表表示に反映されているものについては、上記記載から除いております。

引直しを行っている通貨関連のデリバティブ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

区分	種類	契約額等(百万円)
店頭	為替予約	853
	通貨オプション	35,975
	その他	

(3) 株式関連取引(平成14年9月30日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
店頭	有価証券店頭指数等スワップ 株価指数変化率受取・ 短期変動金利支払 短期変動金利受取・ 株価指数変化率支払	16,648	16,539	108

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を中間連結損益計算書に計上しております。

(4) 債券関連取引(平成14年9月30日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
取引所	債券先物 債券先物オプション	983	3	3

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を中間連結損益計算書に計上しております。

(5) 商品関連取引(平成14年9月30日現在)

該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引(平成14年9月30日現在)

該当ありません。

前連結会計年度末

1 取引の状況に関する事項

当連結会計年度(自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)

(1) 取引の内容

当社グループは、先物、スワップ、オプションなどのデリバティブ取引を行っております。具体的には、金利関連では金利先物、金利先物オプション、金利スワップ、キャップ・フロアー、スワップション取引等、為替関連では先物外国為替取引、通貨スワップ、通貨オプション取引、また、債券関連では債券先物、債券先物オプション取引等です。

(2) 取引の取組方針

デリバティブ取引は、高度化・多様化するお客様の金融ニーズにお応えするための、また、当社グループの資産・負債から生ずるマーケットリスク等を経営体力に相応しい水準にコントロールするための重要なツールであると考えております。一方、デリバティブ取引は、金利・価格変動によるマーケットリスクなど様々なリスクを内包しているため、それらのリスクの特性、量について認識するとともに、厳格なリスク管理体制のもと運営することとしております。

なお、当社グループは取引対象商品の価格変動に対する時価変動率が大きい取引(いわゆるレバレッジの効いた取引)は行っておりません。

(3) 取引の利用目的

バンキング勘定

バンキング勘定では、当社グループの資産・負債について金利・為替リスク等をヘッジする等の目的から、デリバティブ取引を活用しております。

当社グループでは、バンキング勘定のデリバティブ取引について、原則として「時価会計」を適用しております。また、ヘッジを目的としてヘッジ指定したデリバティブ取引のうち、ヘッジに高い有効性が認められる取引については「ヘッジ会計」を適用し、繰延ヘッジ、時価ヘッジあるいは金利スワップの特例処理を行っております。

トレーディング勘定

トレーディング勘定においては、主に短期的な価格変動からの収益獲得手段としてデリバティブ取引を活用しており、また、お客様に対しても、これらの取引を用いた高付加価値商品や、財務リスク管理手段を幅広く提供しておりますが、その際、取引の内容と取引に係るリスクを十分理解していただくよう努めております。

(4) 取引に係るリスクの内容

マーケットリスク

金利、為替レートおよび有価証券等の市場価格やボラティリティの変動により金融商品もしくはポートフォリオの時価が変動し損失を被るリスクです。当社グループでは、BPV(ベース・ポイント・バリュー)(注1)やVaR(バリュー・アット・リスク)(注2)などでリスク量を計測しています。

当連結会計年度におけるトレーディング勘定(連結ベース)のVaR(注3)は以下のとおりです。

最大値(百万円)	最小値(百万円)	平均値(百万円)	前連結会計年度末(百万円)
260	18	100	117

(注) 1 金利が1ベースポイント(=0.01%)変化した場合の取引の時価評価額の変化額。

2 保有期間中に一定の確率でポートフォリオに発生し得る最大損失額を統計的に推計する手法で、金利、為替、債券等の異種商品について統一的な尺度でリスクの計測が可能。

3 信頼区間片側99%、保有期間10日の前提で計測。

信用リスク

信用供与先の財務状況の悪化等により、取引の価値が減少ないし消失し、損失を被るリスクです。デリバティブ取引の場合、想定元本額自体が損失となるわけではなく、その時点で同一のキャッシュフローを持つ契約を第三者との間で締結するコスト(再構築コスト)が損失となります。上記の再構築コストに将来の潜在的なエクスポージャーを加算した与信相当額(BISの自己資本比率規制による連結ベース)は次のとおりになります。

種類	金額(百万円)
金利スワップ	137,238
通貨スワップ	5,152
為替予約	21,376
金利オプション(買い)	448
通貨オプション(買い)	730
株式関連取引	
一括清算ネットリング契約による与信相当額削減効果	120,314
合計	44,632

(5) 取引に係るリスク管理体制

当社グループは、金融機関としての公共的使命、社会的責任を十分に認識したうえで様々なリスクに対し適正な収益を確保するため、適切なリスク管理のもと戦略目標、経営体力に見合ったリスクをとり、収益向上に結びつけていくことを基本方針としております。

当社は、持株会社としてグループ全体のリスク管理に関するモニタリングを行うとともに、信託銀行連結子会社に対して適切な収益・リスク管理体制の整備等について監督・指導を行っております。

信託銀行連結子会社においては、当社の「リスク管理規程」に定めたグループ全体のリスク管理方針に基づき、各社の規模や業務特性に応じた「リスク管理規程」を別に定め、適切なリスク管理を行っております。

具体的には、マーケットリスクに関しては、マーケットリスク管理の基本方針を「マーケットリスク管理規程」において定め、具体的な管理手法やリスク限度枠の設定・管理、また組織分離等については「マーケットリスク管理規則」において定めています。取引実施部門と後方事務部門を明確に分離し、両者から独立して双方を牽制するリスク管理部門としての機能を担う業務管理部が、マーケットリスクを一元的に管理することにより、相互牽制が働く体制をとっております。業務管理部においては、各種リスクリミットの遵守状況や全社的なリスクの把握・分析を行い、日次で経営陣へ報告するとともに月次で経営会議へ報告しております。また、ヘッジ取引に関しましては、「ヘッジ取引管理規則」を制定し、ヘッジ取引の適切な実施・管理を行っております。

信用リスクに関しては、貸出、資金取引、デリバティブ取引等の与信関連取引に係る信用リスク管理の方針を「信用リスク管理規程」として制定し、信用リスク管理体制の整備・強化に取り組んでおります。

デリバティブ取引等のクレジットラインについては、別に定める取扱基準に則り厳正な手続きを経て設定を行うとともに、ラインの遵守状況等についても適切に管理しています。

2 取引の時価等に関する事項

(1) 金利関連取引(平成14年3月31日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
取引所	金利先物				
	売建	1,302		3	3
	買建	2,442		3	3
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利スワップ				
	受取固定・支払変動	3,863,130	1,177,299	102,230	102,230
	受取変動・支払固定	3,629,821	1,058,617	97,378	97,378
	受取変動・支払変動				
	キャップ				
	売建	48,517	800	6	60
	買建	74,686	30,000	6	154
	その他				
	売建	129,000	65,000	2,174	272
	買建	9,000	4,000	84	32
	合計			2,762	4,453

- (注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。
 なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引は、上記記載から除いております。
- 2 時価の算定
 取引所取引につきましては、東京金融先物取引所等における最終の価格によっております。
 店頭取引につきましては、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

(2) 通貨関連取引(平成14年3月31日現在)

通貨スワップ取引については「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第20号)に基づき、期間損益計算を行っております。

期間損益計算を行っている通貨スワップ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

種類	契約額等(百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
通貨スワップ	516,293	1,510	1,510

(注) 時価の算定は、割引現在価値等により行っております。

また、同様に、先物為替予約、通貨オプション等のうち、連結会計年度末日に引直しを行い、その損益を連結損益計算書に計上しているもの、及び外貨建金銭債権債務等に付されたもので当該外貨建金銭債権債務等の連結貸借対照表表示に反映されているもの又は当該外貨建金銭債権債務等が連結手続上消去されたものについては、上記記載から除いております。

引直しを行っている通貨関連のデリバティブ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

区分	種類	契約額等(百万円)
店頭	為替予約	
	売建	456,133
	買建	506,205
	通貨オプション	
	売建	31,313
	買建	60,756

(3) 株式関連取引(平成14年3月31日現在)

該当ありません。

(4) 債券関連取引(平成14年3月31日現在)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
取引所	債券先物				
	売建	2,063		6	6
	買建				

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引につきましては、東京証券取引所等における最終の価格によっております。

(5) 商品関連取引(平成14年3月31日現在)

該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引(平成14年3月31日現在)

該当ありません。

(セグメント情報)

【事業の種類別セグメント情報】

当中間連結会計期間(自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)

	信託銀行業 (百万円)	金融関連業 その他 (百万円)	計 (百万円)	消去 又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
経常収益					
(1) 外部顧客に 対する経常収益	223,036	35,213	258,249		258,249
(2) セグメント間の内部 経常収益	2,885	5,927	8,813	(8,813)	
計	225,922	41,140	267,063	(8,813)	258,249
経常費用	202,233	29,255	231,488	(8,587)	222,900
経常利益(は経常損失)	23,689	11,885	35,574	(225)	35,349

前連結会計年度(自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)

	信託銀行業 (百万円)	金融関連業 その他 (百万円)	計 (百万円)	消去 又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
経常収益					
(1) 外部顧客に 対する経常収益	463,663	68,457	532,120		532,120
(2) セグメント間の内部 経常収益	2,943	5,331	8,275	(8,275)	
計	466,607	73,788	540,395	(8,275)	532,120
経常費用	819,237	50,174	869,412	(7,207)	862,204
経常利益(は経常損失)	352,630	23,614	329,016	(1,067)	330,084

(注) 1 業務区分は、連結会社の主たる事業の内容により区分しております。「金融関連業その他」は、信用保証、リース、クレジット・カード業務等であります。

2 一般企業の売上高及び営業利益に代えて、それぞれ経常収益及び経常利益を記載しております。

3 会計処理基準等の変更

(当中間連結会計期間)

「中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」の(会計方針の変更)に記載のとおり、当中間連結会計期間から年金・証券部門等の信託業務費用のうち個別の信託契約に対応する費用をその発生した連結会計年度の費用として処理する方法から、信託報酬の属する連結会計年度の費用として処理する方法に変更しております。この結果、従来の方法によった場合と比較して、「信託銀行業」について、経常費用は3,949百万円減少、経常利益は同額増加しております。

【所在地別セグメント情報】

全セグメントの経常収益の合計及び全セグメントの資産の金額の合計額に占める本邦の割合が90%を超えているため、所在地別セグメント情報の記載を省略しております。

【国際業務経常収益】

当中間連結会計期間(自平成14年4月1日 至平成14年9月30日)

	金額(百万円)
国際業務経常収益	17,027
連結経常収益	258,249
国際業務経常収益の 連結経常収益に占める割合(%)	6.5

前連結会計年度(自平成13年4月1日 至平成14年3月31日)

	金額(百万円)
国際業務経常収益	70,966
連結経常収益	532,120
国際業務経常収益の 連結経常収益に占める割合(%)	13.3

(注) 1 一般企業の海外売上高に代えて、国際業務経常収益を記載しております。

2 国際業務経常収益は、国内での外貨建諸取引、円建貿易手形取引、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定における諸取引、並びに海外連結子会社の取引に係る経常収益(ただし、連結会社間の内部経常収益は除く。)で、こうした膨大な取引を相手先別に区分していないため、国又は地域毎のセグメント情報は記載しておりません。

(1 株当たり情報)

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前連結会計年度 (自 平成13年4月1日 至 平成14年3月31日)
1株当たり純資産額	円	9.90	79.27
1株当たり中間純利益 (は1株当たり当期純損失)	円	50.19	350.60
潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益	円	22.78	

- (注) 1 前連結会計年度の1株当たり純資産額は、期末連結純資産額から「期末発行済優先株式数×発行価額」を控除した金額を、期末発行済普通株式数(「自己株式」及び「子会社の所有する親会社株式」を除く)で除して算出しております。
- 2 前連結会計年度の1株当たり当期純損失は、連結当期純損失から優先株式配当金総額を控除した金額を、期中平均発行済普通株式数(「自己株式」及び「子会社の所有する親会社株式」を除く)で除して算出しております。
- 3 当中間連結会計期間から「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
この結果、前連結会計年度に係る連結財務諸表において採用していた方法により算定した当中間連結会計期間の1株当たり情報は次のとおりであります。

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)
1株当たり純資産額	円	11.31
1株当たり中間純利益	円	50.70
潜在株式調整後1株当たり中間純利益	円	22.86

- 4 当中間連結会計期間の1株当たり中間純利益及び潜在株式調整後1株当たり中間純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		当中間連結会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)
1株当たり中間純利益	円	50.19
中間純利益	百万円	40,880
普通株式に係る中間純利益	百万円	40,880
普通株式に帰属しない金額	百万円	
普通株式の期中平均株式数	千株	818,810
潜在株式調整後1株当たり中間純利益	円	22.78
中間純利益調整額	百万円	61
うち支払利息(税額相当額控除後)	百万円	61
普通株式増加数	千株	982,329
うち転換社債	千株	11,954
うち優先株式	千株	970,375
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり中間純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要		

- 5 なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、前連結会計年度は純損失が計上されているため、記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当ありません。

(2) 【その他】

該当ありません。

2 【中間財務諸表等】

(1) 【中間財務諸表】

【中間貸借対照表】

区分	注記 番号	当中間会計期間末 (平成14年9月30日)		前事業年度の 要約貸借対照表 (平成14年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
(資産の部)					
流動資産					
現金及び預金		0		14,789	
その他		464		114	
流動資産合計		464	0.1	14,903	1.7
固定資産					
有形固定資産	1	1		1	
無形固定資産		2		2	
投資その他の資産		868,366		868,875	
関係会社株式		586,524		571,272	
関係会社社債		100,000		100,000	
関係会社転換社債		3,390		19,490	
関係会社長期貸付金		178,000		178,000	
その他		451		112	
固定資産合計		868,370	99.8	868,879	98.2
繰延資産					
繰延資産合計		487	0.1	596	0.1
資産合計		869,322	100.0	884,379	100.0

区分	注記 番号	当中間会計期間末 (平成14年9月30日)		前事業年度の 要約貸借対照表 (平成14年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
(負債の部)					
流動負債					
短期借入金	5	3,701			
賞与引当金		41			
その他		2,627		6,614	
流動負債合計		6,370	0.7	6,614	0.8
固定負債					
社債	2	160,800		160,800	
転換社債	3	3,255		19,383	
長期借入金	4	178,000		178,000	
退職給付引当金		198		166	
その他				0	
固定負債合計		342,253	39.4	358,349	40.5
負債合計		348,624	40.1	364,964	41.3
(資本の部)					
資本金					
資本準備金				260,053	29.4
その他の剰余金				243,456	27.5
当期末処分利益				15,915	
その他の剰余金合計				15,915	1.8
				519,425	58.7
自己株式				9	0.0
資本合計				519,415	58.7
資本金					
資本剰余金		260,067	29.9		
資本準備金		243,470			
資本剰余金合計		243,470	28.0		
利益剰余金					
中間期末処分利益		17,216			
利益剰余金合計		17,216	2.0		
自己株式					
自己株式		56	0.0		
資本合計		520,698	59.9		
負債資本合計		869,322	100.0	884,379	100.0

【中間損益計算書】

区分	注記 番号	当中間会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)			前事業年度の 要約損益計算書 (自 平成14年2月1日 至 平成14年3月31日)		
		金額(百万円)		百分比 (%)	金額(百万円)		百分比 (%)
営業収益							
受取利息配当金		2,454			49		
受入手数料		1,333	3,788	100.0	997	1,046	100.0
営業費用							
支払利息		3,461			88		
販売費及び一般管理費	1	1,150	4,611	121.7	230	319	30.5
営業利益(は営業損失)			823	21.7		727	69.5
営業外収益							
有価証券売却益		11,737			22,170		
その他		7	11,744	310.0	0	22,170	2,117.6
営業外費用			336	8.9		582	55.7
経常利益			10,584	279.4		22,315	2,131.5
税引前中間(当期)純利益			10,584	279.4		22,315	2,131.5
法人税、住民税及び事業税		2,200			6,400		
法人税等調整額		242	1,958	51.7	6,400	6,400	611.3
中間(当期)純利益			8,626	227.7		15,915	1,520.2
前期繰越利益			8,590	226.8			
中間(当期)未処分利益			17,216	454.5		15,915	1,520.2

中間財務諸表作成のための基本となる重要な事項

項目	当中間会計期間 (自 平成14年 4 月 1 日 至 平成14年 9 月30日)	前事業年度 (自 平成14年 2 月 1 日 至 平成14年 3 月31日)
1 有価証券の評価基準及び 評価方法	<p>子会社及び関連 子会社株式：移動平均法による原価法により行っております。</p> <p>その他有価証券：移動平均法による原価法により行っております。</p>	<p>子会社株式 子会社株式：移動平均法による原価法により行っております。</p> <p>その他有価証券：移動平均法による原価法により行っております。</p>
2 固定資産の減価償却の方法	<p>(1) 有形固定資産 定額法を採用しております。 なお、耐用年数は次のとおりであります。 器具及び備品：3年～6年 また、取得金額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等に償却する方法を採用しております。</p> <p>(2) 無形固定資産 ソフトウェア：自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期限(5年)に基づく定額法によっております。</p>	<p>(1) 有形固定資産 同 左</p> <p>(2) 無形固定資産 ソフトウェア：同 左</p>
3 繰延資産の処理方法	<p>(1) 創立費：商法の規定により毎期均等額(5年)を償却しております。</p> <p>(2) 新株発行費用：商法の規定により毎期均等額(3年)を償却しております。</p> <p>(3) 社債発行費用：商法の規定により毎期均等額(3年)を償却しております。</p> <p>なお、中間会計期間においては、年額の1/2を償却しております。</p>	<p>(1) 創立費：商法の規定により毎期均等額(5年)を償却しております。</p> <p>(2) 新株発行費用：商法の規定により毎期均等額(3年)を償却しております。</p> <p>(3) 社債発行費用：商法の規定により毎期均等額(3年)を償却しております。</p>

項目	当中間会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前事業年度 (自 平成14年2月1日 至 平成14年3月31日)
4 重要な引当金の計上基準	<p>(1) 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当中間会計期間末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当中間会計期間末において発生していると認められる額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 数理計算上の差異については、発生年度の従業員の平均残存期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理しております。</p> <p>(2) 賞与引当金 賞与引当金は、従業員に対する賞与の支払に備えるため、支給見込み額のうち当中間会計期間に帰属する額を計上しております。</p>	<p>退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。 数理計算上の差異については、発生年度の従業員の平均残存期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理しております。</p>
5 消費税等の会計処理	消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。	同 左

(追加情報)

当中間会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前事業年度 (自 平成14年2月1日 至 平成14年3月31日)
<p>当中間会計期間から企業会計基準第1号「自己株式及び法定準備金の取崩等に関する会計基準」(平成14年2月21日 企業会計基準委員会)を適用しております。これによる当中間会計期間の損益に与える影響はありません。</p> <p>なお、中間財務諸表等規則の改正により、当中間会計期間における中間貸借対照表の資本の部については、改正後の中間財務諸表等規則により作成しております。</p>	

注記事項

(中間貸借対照表関係)

当中間会計期間末 (平成14年9月30日)	前事業年度 (平成14年3月31日)
1 有形固定資産の減価償却累計額 0百万円	1 有形固定資産の減価償却累計額 0百万円
2 社債は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付社債であります。	2 社債は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付社債であります。
3 転換社債は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付転換社債であります。	3 転換社債は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付転換社債であります。
4 長期借入金は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金であります。	4 長期借入金は全額、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金であります。
5 当社は運転資金の効率的な調達を行うため中央三井信託銀行株式会社と当座貸越契約を締結しております。当中間会計期間末における当座貸越契約に係る借入未実行残高等は次のとおりであります。	5 当社は運転資金の効率的な調達を行うため中央三井信託銀行株式会社と当座貸越契約を締結しております。当事業年度末における当座貸越契約に係る借入未実行残高等は次のとおりであります。
当座貸越極度額 20,000百万円	当座貸越極度額 20,000百万円
借入実行残高 3,701百万円	借入実行残高 百万円
差引額 16,298百万円	差引額 20,000百万円

(中間損益計算書関係)

当中間会計期間 (自 平成14年4月1日 至 平成14年9月30日)	前事業年度 (自 平成14年2月1日 至 平成14年3月31日)
1 減価償却実施額	1 減価償却実施額
有形固定資産 0百万円	有形固定資産 0百万円
無形固定資産 0百万円	無形固定資産 0百万円

(有価証券関係)

当中間会計期間及び前事業年度のいずれにおいても子会社株式及び関連会社株式で時価のあるものはありません。

(重要な後発事象)

該当ありません。

(2) 【その他】

該当ありません。

第6 【提出会社の参考情報】

当中間会計期間の開始日から半期報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

有価証券報告書 及びその添付書類	事業年度 (第1期)	自 至	平成14年2月1日 平成14年3月31日	平成14年6月28日 関東財務局長に提出。
---------------------	---------------	--------	-------------------------	--------------------------

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当ありません。

中間監査報告書

平成14年12月18日

三井トラスト・ホールディングス株式会社

取締役社長 古 沢 熙一郎 殿

監査法人 トーマツ

代表社員
関与社員 公認会計士 齊 藤 智 之 ⑩

関与社員 公認会計士 鈴 木 吉 彦 ⑩

当監査法人は、証券取引法第193条の2の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている三井トラスト・ホールディングス株式会社の平成14年4月1日から平成15年3月31日までの連結会計年度の中間連結会計期間(平成14年4月1日から平成14年9月30日まで)に係る中間連結財務諸表、すなわち、中間連結貸借対照表、中間連結損益計算書、中間連結剰余金計算書及び中間連結キャッシュ・フロー計算書について中間監査を行った。この中間監査に当たり当監査法人は、一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に準拠し、中間監査に係る通常実施すべき監査手続を実施した。すなわち、この中間監査において当監査法人は、中間監査実施基準二に準拠して財務諸表の監査に係る通常実施すべき監査手続の一部を省略し、また、連結子会社等については、中間監査実施基準三に準拠して分析的手続、質問及び閲覧等から構成される監査手続を実施した。

中間監査の結果、中間連結財務諸表について会社の採用する会計処理の原則及び手続は、一般に公正妥当と認められる中間連結財務諸表の作成基準に準拠し、かつ、下記事項を除き前連結会計年度と同一の基準に従って継続して適用されており、また、中間連結財務諸表の表示方法は「中間連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成11年大蔵省令第24号)の定めるところに準拠しているものと認められた。

記

会計方針の変更に記載されているとおり、会社は年金・証券部門等の信託業務費用のうち個別の信託契約に対応する費用をその発生した連結会計年度の費用として処理する方法から信託報酬の属する連結会計年度の費用として処理する方法に変更したが、当監査法人は、この変更を平成14年3月の当社子会社の会社分割に伴って年金・証券部門等の個別の信託契約に対応する信託業務費用を適切に把握する体制が当中間連結会計期間に整備され、信託報酬との対応関係が明確になったことから、期間損益をより合理的に算定するためのものであり、正当な理由に基づく変更と認めた。この変更により、前連結会計年度と同一の基準によった場合に比し経常利益及び税金等調整前中間純利益はそれぞれ3,949百万円増加し、中間純利益は2,133百万円増加している。

なお、セグメント情報に与えている影響はセグメント情報の「事業の種類別セグメント情報」の注3に記載のとおりである。

よって、当監査法人は、上記の中間連結財務諸表が三井トラスト・ホールディングス株式会社及び連結子会社の平成14年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する中間連結会計期間(平成14年4月1日から平成14年9月30日まで)の経営成績及びキャッシュ・フローの状況に関する有用な情報を表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は関与社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。
以上

上記は、中間監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。

中間監査報告書

平成14年12月18日

三井トラスト・ホールディングス株式会社
取締役社長 古 沢 熙一郎 殿

監査法人 トーマツ

代表社員
関与社員 公認会計士 齊 藤 智 之 ⑩

関与社員 公認会計士 鈴 木 吉 彦 ⑩

当監査法人は、証券取引法第193条の2の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている三井トラスト・ホールディングス株式会社の平成14年4月1日から平成15年3月31日までの第2期事業年度の中間会計期間(平成14年4月1日から平成14年9月30日まで)に係る中間財務諸表、すなわち、中間貸借対照表及び中間損益計算書について中間監査を行った。この中間監査に当たり当監査法人は、一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に準拠し、中間監査に係る通常実施すべき監査手続を実施した。すなわち、この中間監査において当監査法人は、中間監査実施基準二に準拠して財務諸表の監査に係る通常実施すべき監査手続の一部を省略した。

中間監査の結果、中間財務諸表について会社の採用する会計処理の原則及び手続は、一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠し、かつ、前事業年度と同一の基準に従って継続して適用されており、また、中間財務諸表の表示方法は「中間財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和52年大蔵省令第38号)の定めるところに準拠しているものと認められた。よって、当監査法人は、上記の中間財務諸表が三井トラスト・ホールディングス株式会社の平成14年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する中間会計期間(平成14年4月1日から平成14年9月30日まで)の経営成績に関する有用な情報を表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は関与社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

上記は、中間監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。